

菊池市文化財調査報告第15集

玉祥寺遺跡

玉祥寺遺跡

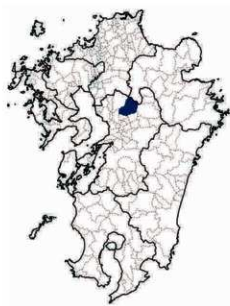
—袈裟尾地区中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024年

菊池市教育委員会

玉祥寺遺跡

— 袈裟尾地区中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —



2024年
菊池市教育委員会





図版1 玉祥寺遺跡遠景（南から）



図版2 令和2年度調査区遠景（東から）



図版3 令和3年度調査区全景（南から）



図版4 S101 鉄製紡錘車出土状況（東から）

序 文

菊池市は熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山を源とする一級河川菊池川とその支流合志川、追間川によって、豊かな自然環境が育まれています。その歴史は古く、旧石器時代から近代にかけて長い人間の生活が営まれてきました。また、南北朝時代に南朝方に忠節を尽くして戦いその名を謳われた菊池一族の本拠としても知られています。さらに近世には多くの優れた学者や教育家を輩出した文教の地でもあります。

本書は令和2～3年度に袈裟尾地区中山間地域総合整備事業に先がけておこなった「玉祥寺遺跡」発掘調査報告書です。調査の結果、溝と竪穴建物を中心とした古代以降の遺構・遺物が数多く発見されました。当遺跡が所在する袈裟尾地区は古代山城として知られる鞠智城からそれほど近く、今回の調査により同時代にこの場所で集落が営まれていたことが分かったのは大きな発見です。周辺地域の古代の様相を解明するうえで、さらに重要な資料となったと考えております。

本書が文化財保護と学術研究の推進に寄与できましたら幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の作成にいたるまでご協力をいただきました多くの方々に、心から感謝申し上げます。

令和6年2月

菊池市教育委員会

教育長 音光寺 以章

例 言

1. 本書は奈良盆地地区中山間地域総合整備事業に伴い、事前に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施したのは熊本県菊池市玉祥寺に所在する「玉祥寺遺跡」で、熊本県北広域本部からの委託を受けて菊池市教育委員会が実施したものである。
3. 当遺跡の発掘は令和2～3年度にかけておこなわれたもので、整理は令和4～5年度におこなった。
4. 遺跡名は「玉祥寺遺跡」と呼称する。整理の際用いた略記号は「GSZ」である。
5. 遺構は調査者が実測をおこない、一部委託をおこなった。遺構内の遺物は調査者が図面におとし、それ以外の包含層中の遺物は基本的に光波トランシットで点取をおこなった。現場写真撮影は調査者がおこなった。4級基準点・水準点・メッシュ杭設置業務は八洲開発株式会社(令和2年度)、株式会社 ARIAKE(令和3年度)に委託し、空中写真撮影業務は大成ジオテック株式会社(令和2年度)、九州航空株式会社(令和3年度)に委託した。整理作業において自然化学分析業務は株式会社古環境研究所(令和4年度)、遺物実測業務は株式会社 ARIAKE(令和4年度)、鉄製品の保存処理を株式会社英文化(令和4年度)、遺物写真撮影業務は株式会社九州文化財研究所(令和5年度)にそれぞれ委託した。
6. 本書掲載の図面縮尺は遺構を1/60、遺物は土器を1/3、石器を1/1、1/2、で記載し、図版中に明記している。それ以外の縮尺についても図版中に明記している。
7. 遺構は種別を示す記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。
SI(竪穴建物)、SF(道路状遺構)、SD(溝状遺構)、SK(土坑)
8. 基本土層注記、遺物観察表に記している色調については「新版標準土色帖 2000年版」(1999日本色研事業株式会社)を使用した。
9. 本書に掲載した遺物・実測図・写真等は菊池市教育委員会生涯学習課で保管している。

本文目次

序文	
例言	
第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の組織	2
第II章 環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 調査の成果	
第1節 調査区の設定	6
第2節 基本層序	6
第3節 調査の成果	20
第IV章 総括	79
第V章 自然科学分析	83
写真図版	
報告書抄録	

本文図版目次

第1図 周辺遺跡分布図	4
第1表 周辺遺跡一覧	5
第2図 基本土層図	6
第2表 遺構一覧	7
第3図 調査区全体図	8
第4図 1区遺構配置図	9
第5図 2区遺構配置図	10
第6図 3・11区遺構配置図	11
第7図 4区遺構配置図	12
第8図 5区遺構配置図	13
第9図 6区遺構配置図	14
第10図 7・13区遺構配置図	15
第11図 8区遺構配置図	16
第12図 9区遺構配置図	17
第13図 10区遺構配置図	18
第14図 12区遺構配置図	19
第15図 S101実測図	21

第16図 S102実測図	22
第17図 S102土層断面図	23
第18図 S102カマド実測図	24
第19図 S101出土遺物実測図	25
第20図 S102出土遺物実測図	25
第21図 S103実測図	26
第22図 S103カマド実測図	27
第23図 S104実測図	28
第24図 S105実測図	29
第25図 S106～S109実測図	30
第26図 S106実測図	31
第27図 S107実測図	32
第28図 S106出土遺物実測図	33
第29図 S107出土遺物実測図	33
第30図 S108実測図	35
第31図 S108カマド実測図	36
第32図 S108出土遺物実測図	37
第33図 S109実測図	37
第34図 S109カマド実測図	38
第35図 S109出土遺物実測図①	39
第36図 S109出土遺物実測図②	40
第37図 S110・S111実測図	42
第38図 S110実測図	43
第39図 S110カマド実測図	44
第40図 S110出土遺物実測図	44
第41図 S111実測図	45
第42図 S111出土遺物実測図	45
第43図 S112実測図	46
第44図 S112出土遺物実測図	46
第45図 S113実測図	46
第46図 SF01・SD03実測図	47
第47図 SF01出土遺物実測図	47
第48図 SF02・SF03実測図	48
第49図 SF04実測図	49
第50図 SF05実測図	51
第51図 SF05出土遺物実測図	52
第52図 SF06・SF07実測図①	53
第53図 SF06・SF07実測図②	54
第54図 SD01実測図	55
第55図 SD02実測図	55

第56図	SD04 実測図	56
第57図	SD05 実測図	57
第58図	SD06 実測図	57
第59図	SD07・SD08 実測図	58
第60図	SD09・SD10 実測図	59
第61図	SD11 実測図	60
第62図	SD12～SD16、SD16 獣骨出土状況実測図	61
第63図	SD16 出土遺物実測図	63
第64図	SD17 実測図	63
第65図	SD17 出土遺物実測図	63
第66図	SD18 実測図	63
第67図	SD19・SD21 実測図	64
第68図	SD19 出土遺物実測図	65
第69図	SD20 実測図	65
第70図	SD22 実測図	65
第71図	SK01 実測図	66
第72図	SK02 実測図	66
第73図	SK03 実測図	67
第74図	SK03 出土遺物実測図	67
第75図	SK04 実測図	68
第76図	SK04 出土遺物実測図	68
第77図	1号焼土集中実測図	69
第78図	2号焼土集中実測図	69
第79図	1号遺物集中実測図	70
第80図	1号遺物集中出土遺物実測図	71
第81図	遺構外出土遺物実測図①	72
第82図	遺構外出土遺物実測図②	73
第83図	遺構外出土遺物実測図③	75
第84図	遺構外出土遺物実測図④	76
第85図	遺構外出土遺物実測図⑤	77
第86図	熊本県内出土鉄製紡錘車	80
第3表	遺物観察表	89

図版3 令和3年度調査区全景（南から）

図版4 S101 鉄製紡錘車出土状況（東から）

写真図版

図版5 1区調査区完掘状況

図版6 2区調査区完掘状況・3区調査区完掘状況

図版7 4区調査区完掘状況・5区調査区完掘状況

図版8 6区調査区完掘状況・7区調査区完掘状況

図版9 8区調査区完掘状況・9区調査区完掘状況

図版10 10区調査区完掘状況・11区調査区完掘状況

図版11 12区調査区完掘状況・13区調査区完掘状況

図版12～24 遺構写真

図版24～27 出土遺物写真

写真図版目次

巻頭カラー

図版1 玉祥寺遺跡遠景（南から）

図版2 令和2年度調査区遠景（東から）

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

平成30年度、菊池市において袈裟尾地区中山間地域総合整備事業が採択された。この事業は菊池市袈裟尾・玉祥寺におけるほ場整備事業であり、受益面積は166,051㎡である。事業に先立ち、熊本県教育庁文化課は遺跡台帳の照合をおこない、当地に埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、その結果を県農政部へ通知し、併せて確認調査の実施を求めた。確認調査は平成27年10月26日、27日、平成28年2月10日、3月3日、令和元年5月21日、22日に菊池市教育委員会が実施した。その結果、一部において遺跡の存在が確認されたため、これを受けて遺跡保存の協議を重ね、やむをえず削平される部分については記録保存のための発掘調査が必要と判断した。菊池市教育委員会で熊本県東広域本部の委託を受け、令和2・3年度にかけて熊本県菊池市玉祥寺に所在する「玉祥寺遺跡（遺跡番号：菊池52）」の発掘調査を実施した。

令和2年度は令和2年5月27日付け北農整第117号により依頼を受け、令和2年7月8日付けで実施協定書を締結。令和3年度は令和3年5月11日付け北農整第51号により依頼を受け、令和3年6月25日付けで実施協定書を締結。令和4年度は令和4年5月20日付け北農整第73号により依頼を受け、令和4年6月16日付けで実施協定書を締結。令和5年度は令和5年4月25日付け北農整第52号により依頼を受け、令和5年6月15日付けで実施協定書を締結。報告書作成のための整理作業は菊池市教育委員会が令和4年度・令和5年度におこない、令和5年度に報告書を刊行した。

第2節 調査の経過

【平成27年度・令和元年度確認調査】

事業対象地における埋蔵文化財の状況を確認し遺跡範囲を絞り込むため、平成27年10月26日、27日、平成28年2月10日、3月3日、令和元年5月21日、22日の2か年度6日間にかけて28か所のトレンチを設定し、確認調査を行った。その結果、14か所より縄文時代～弥生時代、古代・中世の遺物、ビット、硬化面などが検出された。

【令和2・3年度本調査】

《令和2年度》

(令和2年9月2日)6区表土剥ぎ開始。(9月10日)5・7区表土剥ぎ開始。(9月14日)発掘調査現場作業員作業開始。(9月15日)1区西側表土剥ぎ開始。(9月29日)3区表土剥ぎ開始。(11月5日)3・5区空中写真撮影。(11月16日)8区表土剥ぎ開始。(11月25日)1区西側・6区空中写真撮影。(11月26日)1区西側埋め戻し開始。(12月1日)6区埋め戻し開始。(12月2日)4区表土剥ぎ開始。(12月4日)2区表土剥ぎ開始。(12月11日)1区東側表土剥ぎ開始。(令和3年2月10日)1区東側・2・4・7・8区空中写真撮影。(2月17日)2区埋め戻し開始。(2月23日)8区埋め戻し開始。(2月25日)撤収。(3月1日)7区埋め戻し。4区埋め戻し開始。(3月4日)1区東側埋め戻し開始。(3月9日)令和2年度調査終了。

《令和3年度》

(令和3年8月27日)12・13区表土剥ぎ。(8月30日)9・10区表土剥ぎ開始。(9月1日)発掘調査現場作業員作業開始。(9月22日)県文化課矢野氏来跡。(9月24日)11区表土剥ぎ開始。(10月5日)13区ドローン撮影(菊池市役所市長公室広報交流係今林)(10月19日)13区埋め戻し。(10月21・22日)県文化課村崎氏来跡。(10月26日)菊池市文化財保護委員長坂口氏来跡。(11月12日)9～12区空中写真撮影。(11月18日)11区埋め戻し開始。(11月19日)9区埋め戻し開始。(11月26日)12区埋め戻し開始。(11月29日)10区埋め戻し開始。撤収。(11月30日)令和3年度調査終了。

玉祥寺遺跡

第3節 調査の組織

調査主体 菊池市教育委員会

調査責任 渡邊 和博（菊池市教育長）～令和3年7月7日
音光寺 以章（菊池市教育長）令和3年7月8日～

調査総括 山本 美千代（生涯学習課長）令和2年度
古庄 和彦（生涯学習課長）令和3、4年度
川口 克明（生涯学習課長）令和5年度
坂本 憲昭（生涯学習課長補佐）令和5年度
阿南 亨（文化振興係長）

調査担当 西坂 知紘（文化振興係主任事）
椎葉 天昭（生涯学習課発掘調査専門員）令和2年度～令和4年度
北原 美和子（生涯学習課発掘調査専門員）令和3年度
中尾 健照（生涯学習課発掘調査専門員）令和4、5年度

報告書作成 西坂 知紘、中尾 健照、椎葉 天昭（生涯学習課）

【発掘調査現場作業員：令和2、3年度】

青木 立子、伊藤 宏美、井上 恵伸、岩下 孝、上田 則行、上村 久子、上村 由和、緒方 雄二、垣田 優、川上 紀男、
木下 美智子、齊藤 珠樹、坂口 澄子、清水 幸尋、田上 征郎、永田 宗一、西本 あかね、袴田 勝志、濱砂 佐織、
深迫 弘明、福馬 雅美、藤永 一也、村山 國誠、守井 昭雄、森田 幸雄、森永 恵美、山崎 知津子、吉村 弘

【発掘調査整理作業員：令和4、5年度】

井上 多恵子、垣田 優、木村 奈緒美、藏本 弘子、中川 治、古田 喜美子

【調査協力者】（順不同・敬称略）

末武 希代子、西住 欣一郎、宇野 文子、木村 紀美子、中川 秀美、平野 智子（菊池市教育委員会生涯学習課）

第Ⅱ章 環境

第1節 地理的環境

まず当遺跡周辺の地理的環境について述べる。「玉祥寺遺跡」の所在する菊池市は、九州の中部熊本県の北部に位置し、東は阿蘇郡、西は山鹿市と接し、北は大分県と県境を接する。平成17年3月に旧菊池市、七城町、酒水町、旭志村の4市町村が合併して現在に至る。市の面積の大半は山地が占め、起伏の激しい北部の八方ヶ岳連山と、なだらかな裾野を持つ東部の鞍岳につながる山々は標高1000mを測り、それらは南西部に向かってゆるやかに傾斜していき、標高100～400mの丘陵地が広がる。菊池を流れる主な河川は菊池川、追間川、合志川である。いずれも多くの支流を伴いながら西進し、阿蘇山の噴火で形成された阿蘇溶結凝灰岩（火砕流堆積物）を侵食して流域に平野部を形成する。

当遺跡は追間川の右岸側、菊池川によって形成された菊池盆地東端の段丘面に位置し、北には八方ヶ岳から南西に延びる丘陵の先端部分に形成された米原台地が広がっている。

第2節 歴史的環境

【旧石器時代・縄文時代】

旧石器時代、菊池川流域の伊野遺跡、原遺跡、細長地区では数点のナイフ形石器、長野地区では黒曜石製の尖頭器、鞍岳山麓では馬糞塚遺跡から石槍、湯舟地区から尖頭器が採取されている。

縄文早期から中期にかけては早期の押型土器などが少量出土するほか、目立った生活痕跡はみとめられないが、後期から晩期には平野部や台地に大規模な生活拠点が出現する。菊池川流域の平野に天砥遺跡、花房台地上に万太郎遺跡、木柑子遺跡群、台地の南に三万田東原遺跡、合志川をはさんだ南の丘陵に伊坂遺跡群などが所在する。三万田東原遺跡は、昭和6年に県内の考古学研究の中心的人物であった坂本経堯氏らによってトレンチ調査がおこなわれた住居址、多量の土偶が確認された熊本を代表する縄文時代の遺跡であり、縄文土器の一形式である三万田式土器の指標遺跡である。また近年の研究では、クロム白雲母を原材料とする玉の製作遺跡であるとの指摘がなされている。

【弥生時代】

菊池川流域に西寺遺跡、北田遺跡、外園遺跡、合志川流域に藤巻遺跡、平町遺跡があげられる。弥生時代後半、菊池川上流域の台地上では小野崎遺跡、うてな遺跡、山鹿市の方保田東原遺跡で大規模な環濠集落が営まれていた。鞍岳からびる丘陵上に位置する藤尾文石墓からは、約10基の支石墓、積石墓4基、甕積墓2基などが発見された。外園遺跡、うてな遺跡からは、中国の新代（9～23年）に鋳造された古銭貨泉が出土している。

【古墳時代】

合志川流域には久米若宮古墳など5世紀代の古墳群、合志川支流の塩塚川流域には大陸の様相が見てとれる5世紀代の古墳群、菊池川左岸の花房台地には木柑子（フタツカサン）古墳、木柑子高塚古墳などの6世紀前半代の古墳、菊池川右岸には袈裟尾高塚古墳など6世紀中ごろの小古墳群が所在し、流域ごとの古墳の変遷をみてとることができる。また、菊池川や合志川にも小規模の横穴墓が点在する。

【古代】

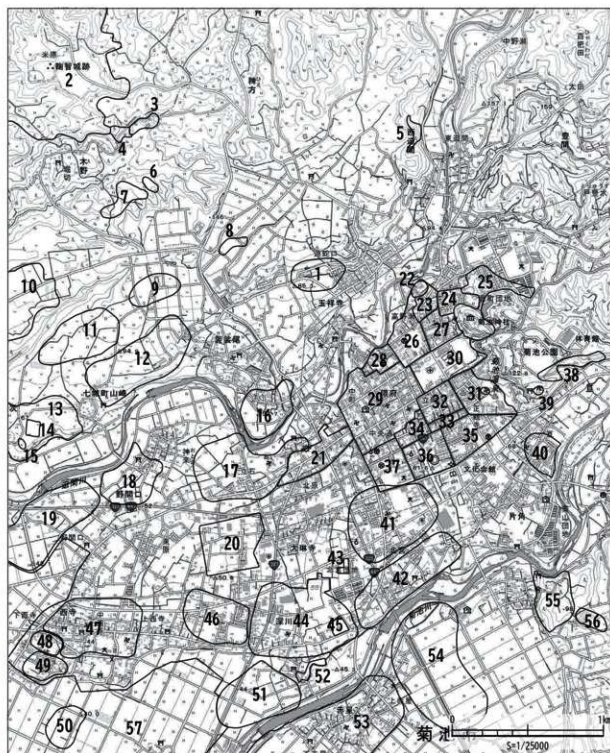
天智2（663）年の白村江の戦いの後、唐・新羅軍の侵攻にそなえて配置された城のひとつが鞠智城（くまのき）であると考えられ、『続日本紀』に修復の記録がのこっている。大化の改新以降の郡国制の下、肥後国は14の郡に編成されたが、現在の菊池は菊池郡と皮石郡、後に皮石郡から分離した山本郡の一部にあたる。菊池郡と皮石郡は菊池川と合志川流域を主体とする郡であったと考えられる。菊池郡は9郷あり、そのうち8郷は現在の地名から菊池と七城にまたがる一帯である。皮石郡は、現在の旭志と酒水、山本郡は現在の酒水の西部と想定される。『日本書紀』では持統10（696）年の4月、肥後国皮石（合志）郡の郡名が初見される。当時の九州の交通網は、大宰府を中心として整えられていた。鞠智城は後に肥後国の北部に位置する政庁のような役割をはたしたと考えられ、大宰府との間に車路と呼ばれる官道が通っていた。花房台地上の万太郎遺跡、医者どん坂遺跡では古代官道が敷設され、遺跡周辺には車町、車地、馬渡の地名がのこる。

【中世～近代】

中世菊池一族は蒙古襲来時には国防に務め、南北朝時代は南朝方の懐良親王を擁し、九州の南朝勢力の中心であった。隈府土井ノ外遺跡では14世紀後半～15世紀前半の館跡が確認され、当時から隈府の街並みが形成されていたことが推測される。また、近年菊池川に面した北宮館跡とその周辺の確認調査により、掘立建物跡、護岸施設、舟着き場が発見されている。菊池一族が当初の地を拠点としていたという伝承を裏付ける成果として注目される。この他、菊池市南部は合志一族の勢力圏であったため、南北朝期には宮方、武家方が争う緊迫した情勢もうかがうことができる。

戦国時代後半になると菊池一族の力は衰え、隈部、城氏などの家臣の力が台頭し、彼らの動静が肥後国衆一揆のきっかけともなる。その後の菊池は細川氏の肥後藩政下、隈府が在町として栄えた。

近代には、花房台地上に約150haの面積に大川洗陸軍飛行学校の花房分教所として菊池飛行場が建設されていた。菊池飛行場の敷地が含まれる医者どん坂遺跡では当時の爆撃機や演習弾が出土しており、近辺には戦後の開拓でも利用された給水塔をはじめ、兵舎や弾薬庫、格納庫の外壁など当時の建造物群が現在も残っている。



第1図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	210-052	三祥寺遺跡	三祥寺	弥生	包蔵地	銅鏡、野辺田式、石斧出土
2	382-100	新野城跡	山南・菊池市 米原 長者原	古墳	古墳	古代山城
3	210-146	山田横穴群	木野 堀切	古墳	古墳	
4	210-147	福南の白遺跡	木野 堀切	縄文～中世	包蔵地	
5	210-045	西道間横穴群	西道間	古墳	古墳	現2基 布有文化財(考古資料)指定：西道間横穴出土品
6	210-148	大井樋穴群	木野	古墳	古墳	
7	210-149	大井樋横穴群	木野	古墳	古墳	A～Eとある
8	210-067	堀切横穴群	木野 堀切	古墳	古墳	
9	210-070	西村上遺跡	栗原尾 西村上	縄文	集落跡	
10	401-006	木次一本松遺跡	七城町木次 一本松	縄文	包蔵地	縄文後期居住跡、御領式、勾玉
11	401-011	山崎遺跡	七城町山崎 屋敷	縄文	包蔵地	御領式土器、石葺
12	210-069	竹ノ上原遺跡	栗原尾 竹ノ上原	古代	集落	
13	401-009	木次遺跡	七城町木次 久保ノ上	古墳	包蔵地	野辺田式土器、土師器、須恵器、類・舟形石槌(十連寺石槌)
14	401-007	十連寺跡	七城町木次 久保ノ上	奈良・平安	寺社	奈良・平安期、塔心礎、布瓦葺指定史跡(旧七城町)：十連寺跡礎石
15	401-008	神尾城跡	七城町木次 屋敷	中世	城	十八外城 木次城の別名あり
16	210-060	栗原尾遺跡	栗原尾	弥生	包蔵地	
17	210-061	立石遺跡	熊府(通称 立石)	弥生	包蔵地	
18	210-150	瑞来遺跡	野田口 瑞来	古代	包蔵地	
19	210-034	南町遺跡	野田口 南町	古代	包蔵地	葬壇4基
20	210-163	桑里跡	熊府・大塚寺・西寺	古代・中世	生産	
21	210-184	熊府南古町遺跡	熊府 南古町	弥生後期・中世	包蔵地	弥生土器 H21.7.21新規記載・H21.9.10範囲拡大
22	210-053	孔子堂跡	熊府 高野瀬	中世	寺社	
23	210-053	熊府孔子堂遺跡	熊府 高野瀬	中世	寺社	
24	210-179	熊府北城下遺跡	熊府 北城下	中世		H21.7.21新規記載
25	210-054	守山城及び内裏屋	熊府 城山 高野瀬	中世	城	旧：守山城跡と内裏屋跡
26	210-068	熊府土井ノ外遺跡	熊府 高野瀬 土井ノ外	中世	包蔵地	熊本県文化財調査報告248集「熊府土井ノ外遺跡(菊池高校)」旧菊池氏離跡(H21.4.3名称変更)
27	210-180	熊府北小路遺跡	熊府 北小路	中世		H21.7.21新規記載
28	210-174	熊府屋敷遺跡	熊府 屋敷	中世		H21.7.21新規記載
29	210-172	熊府町遺跡	熊府 町	中世・近世		H21.7.21新規記載
30	210-175	熊府城下遺跡	熊府 城下	中世		H21.7.21新規記載
31	210-178	熊府守山遺跡	熊府 守山	中世		H21.7.21新規記載
32	210-176	熊府鹿耳遺跡	熊府 鹿耳場	中世		H21.7.21新規記載
33	210-177	熊府堀木屋敷遺跡	熊府 堀木屋敷	中世		H21.7.21新規記載
34	210-173	熊府敷の内遺跡	熊府 敷の内	中世		H21.7.21新規記載
35	210-183	熊府堀木遺跡	熊府 堀木	中世		H21.7.21新規記載
36	210-182	熊府前田遺跡	熊府 前田	中世		H21.7.21新規記載
37	210-181	熊府南田遺跡	熊府 南田	中世		H21.7.21新規記載
38	210-066	豆遺跡	豆	弥生	包蔵地	水田中に包含地あり
39	210-108	東福寺古塔群	直 粟山	中世	石造物	菊池氏開佛五輪塔、その地の群
40	210-107	築地横穴群	直 築地	古墳	古墳	北麓ノ段基 市指定史跡・築地百穴(横穴集群)指定：築地百穴
41	210-058	北田遺跡	熊府 上場外ほか	弥生	包蔵地	熊府中学校庭遺跡(北中遺跡)含む
42	210-084	北宮遺跡	北宮 西原	弥生	包蔵地	R3新規記載
43	210-338	大塚寺東曹寺遺跡	大塚寺	古代	包蔵地	城跡公園 弥生土器、土師器
44	210-087	菊之池A遺跡	深川 菊之池	弥生	包蔵地	布瓦瓦、土師器 観音ノ本遺跡含む R3本調査 菊池市文化財調査報告14集「菊之池A遺跡」(2023)
45	210-083	北宮館跡(菊之城跡)	北宮 城ノ原	弥生～中世	城	十八外城
46	210-075	深川遺跡	深川 諏訪原	縄文～古墳	包蔵地	無糸文、御領式、野辺田式、土師器
47	210-086	西寺遺跡	西寺(通称 高田)	古代・中世	包蔵地	
48	210-085	西寺都賀及び土屋跡	西寺(通称 高田)	古代・中世	包蔵地	布瓦瓦 菊池郡家か?
49	210-088	南園遺跡	西寺 南園	古代・中世	包蔵地	布瓦瓦、土師器
50	210-036	西寺土遺跡	西寺 土屋敷など	弥生	包蔵地	住居跡、土師器、弥生土器
51	210-076	深川古池	深川 古池	弥生	包蔵地	
52	210-187	菊之池B遺跡	深川	中世	包蔵地	R2新規記載
53	210-187	赤星宮ノ前	赤星 宮ノ前	古墳	包蔵地	土師器
54	210-092	赤星堀土・水溜遺跡	赤星 堀土・水溜	縄文～古代	包蔵地	遺跡
55	210-170	山崎城跡	野田口 山崎ノ上	中世	包蔵地	十八外城 山城
56	210-170	藤田土原遺跡	藤田 土原	弥生	包蔵地	弥生土器。H17.2.7新規記載
57	210-161	桑里跡	西寺・長田 七城町甲佐町・新古岡	古代・中世	生産	

第Ⅲ章 調査の成果

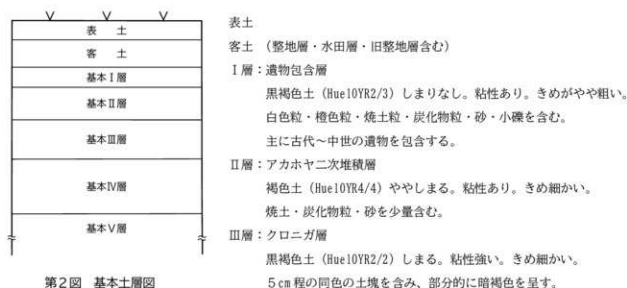
第1節 調査区の設定

本調査では、確認調査によって埋蔵文化財が確認された箇所において、事業により破壊される部分に1～13区（9区のみ筆境で区分し、北から9-1区、9-2区、9-3区と呼称）の調査区を設定した。

調査対象範囲は国土座標（世界測地系）で求められるようにし、X = - 1040、Y = - 18130 を基準にして 10 m × 10 m のグリッドを第3図のとおり設定した。また、1～13区それぞれの遺構配置図は第4図～第14図のとおりである。

第2節 基本層序

当報告書において、遺跡の基本層序は次のとおりである。



第2図 基本土層図

Ⅳ層：シロニガ層 / ニガ土層

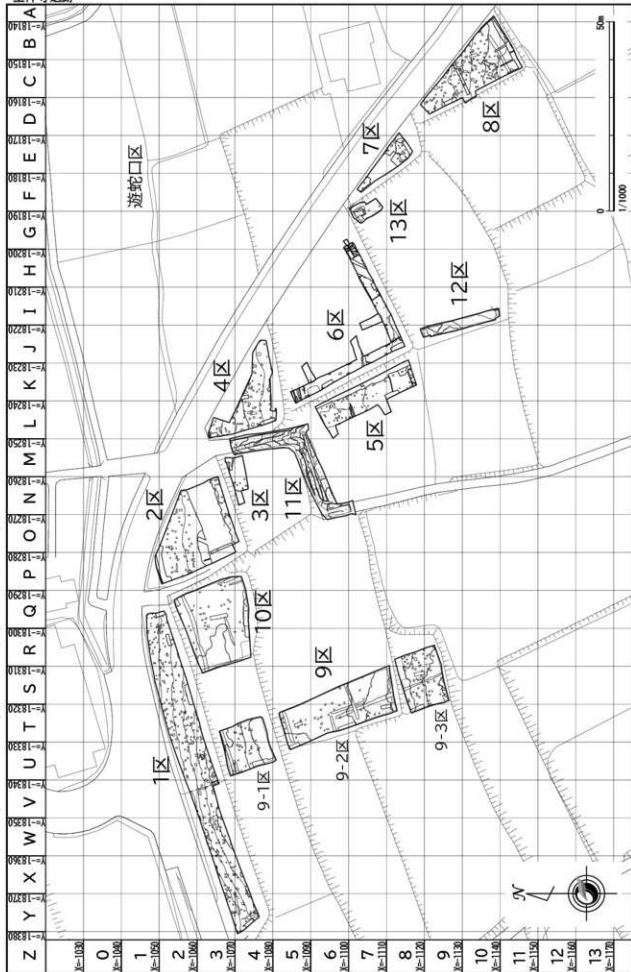
にぶい黄褐色（Hue10YR5/4）～明黄褐色（Hue10YR6/8）を呈する粘質土。
AT 由来の白色ガラス粒や砂・小礫をわずかに含む。下に行く程土塊のブロックが大きく粘性も強くなる。
場所により中間に黒褐色粘質土層が入るなど、色相や土質から大まかに3つの層に分類できるが漸移層などで境界が不明瞭な箇所や更に複数層に細分化できる箇所もみられた。

V層：ローム層

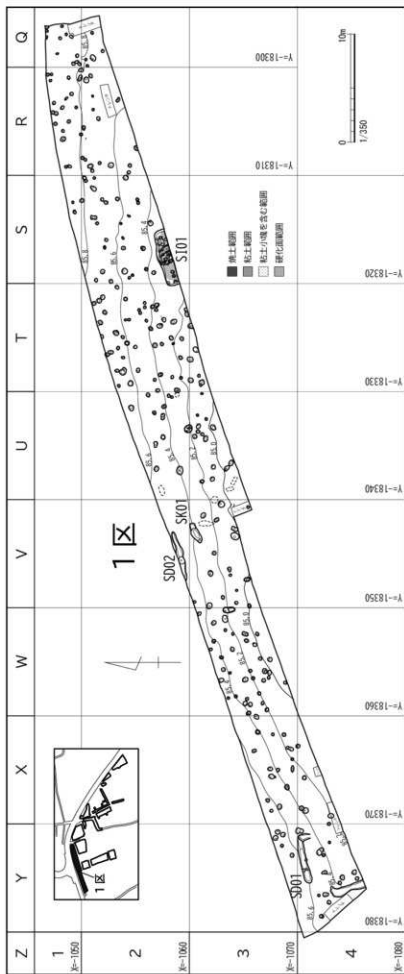
明黄褐色粘質土（Hue10YR7/6）しまる。粘性強い。きめ細かい。
砂・礫を少量含む。

第2表 遺構一覧

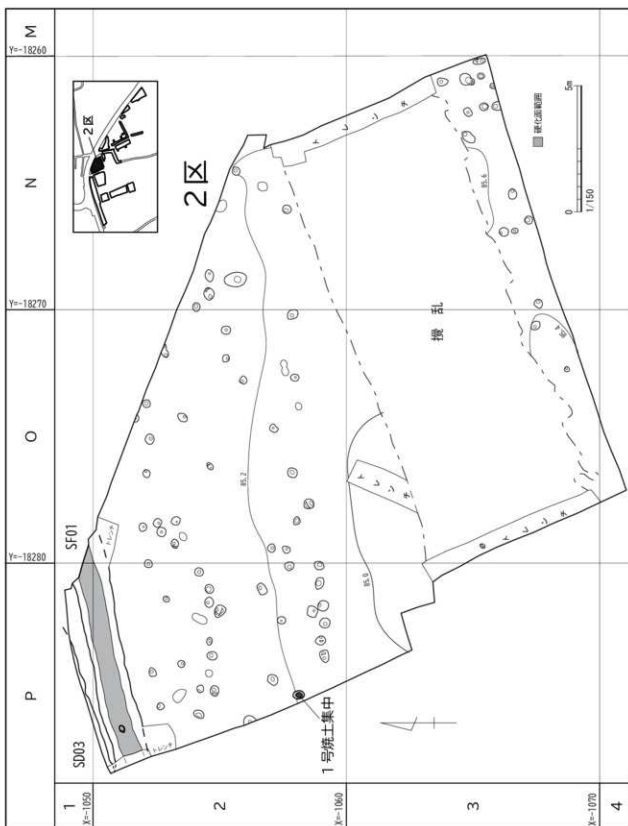
遺構名	調査区	グリッド	種別	時期	図版番号
S101	1区	S-2 (西壁 T-2)	竪穴建物	古代	15・19
S102	9-1区	T-U-4	竪穴建物	古代	16～18・20
S103	6区	K-5・6	竪穴建物	古代	21・22
S104	6区	I-H-7	竪穴建物	古代	23
S105	6区	G-H-6・7	竪穴建物	古代	24
S106	7区	E-F-7・8	竪穴建物	古代	25・26・28
S107	7区	E-7・8、F-7	竪穴建物	古代	25・27・29
S108	7区	E-7・8、F-7	竪穴建物	古代	25・30～32
S109	7区	E-7・8、F-7	竪穴建物	古代	25・33～36
S110	12区	I・J-9	竪穴建物	古代	37～40
S111	12区	J-9	竪穴建物	古代	37・41・42
S112	9-1区	U-4	竪穴建物	古代	43・44
S113	12区	(J-8)	竪穴建物	古代	45
SF01	2区	O-P-1・2	道路状遺構	中世	46・47
SF02	4区	K-4、L-4・5	道路状遺構	中近世か	48
SF03	4区	K-4	道路状遺構	中近世か	48
SF04	6区	K-L-5	道路状遺構	中近世か	49
SF05	11区	L-5、M-5・6、N-6	道路状遺構	中近世～	50・51
	6区	H-7			
	12区	I・J-9・10			
SF06	8区	B-10・11、C-11	道路状遺構	中近世か	52・53
SF07	8区	A-10、B-10・11、C-11	道路状遺構	中近世か	52・53
SD01	1区	Y-4	溝状遺構		54
SD02	1区	Y-2	溝状遺構		55
SD03	2区	P-1・2	溝状遺構		46
SD04	10区	Q-2、R-2・3、S-3	溝状遺構	中近世か	56
SD05	10区	R-3・4、S-3	溝状遺構	中近世か	57
SD06	10区		溝状遺構		58
SD07	10区	P-3・4	溝状遺構	中近世か	59
SD08	10区	P-3・4	溝状遺構	中近世か	59
SD09	9-1区	T-3、U-3・4	溝状遺構	中近世か	60
SD10	9-1区	U-3・4	溝状遺構	中近世か	60
SD11	9-2区	U-T-5	溝状遺構	中近世か	61
SD12	9-2区	T-6	溝状遺構	中近世か	62
SD13	9-2区	S-7、T-6・7	溝状遺構	中近世か	62
SD14	9-2区	S-6・7、T-7	溝状遺構	中近世か	62
SD15	9-2区	S-T-8	溝状遺構	中近世か	62
SD16	9-2区	S-7・8 (・9)、T-6・7	溝状遺構	中近世か	62・63
	9-3区	S-8・9			
SD17	4区	L-3	溝状遺構	中近世か	64・65
SD18	6区	K-L-5	溝状遺構		66
SD19	5区	L-6、K-6～8、J-8	溝状遺構	近世か	67・68
SD20	5区	L-7	溝状遺構	近世か	69
SD21	5区	K-6～8	溝状遺構	中近世か	67
SD22	8区	C-9・10	溝状遺構		70
SK01	1区	Y-3	土坑		71
SK02	10区	P-Q-4	土坑		72
SK03	6区	J-8	土坑 (集石)	中近世か	73・74
SK04	6区	I・J-8	土坑	中世～か	75・76
1号焼土集中	2区	P-2	焼土集中		77
2号焼土集中	8区	C-9	焼土集中		78
1号遺物集中	7区	E-8	遺物集中	古代	79・80



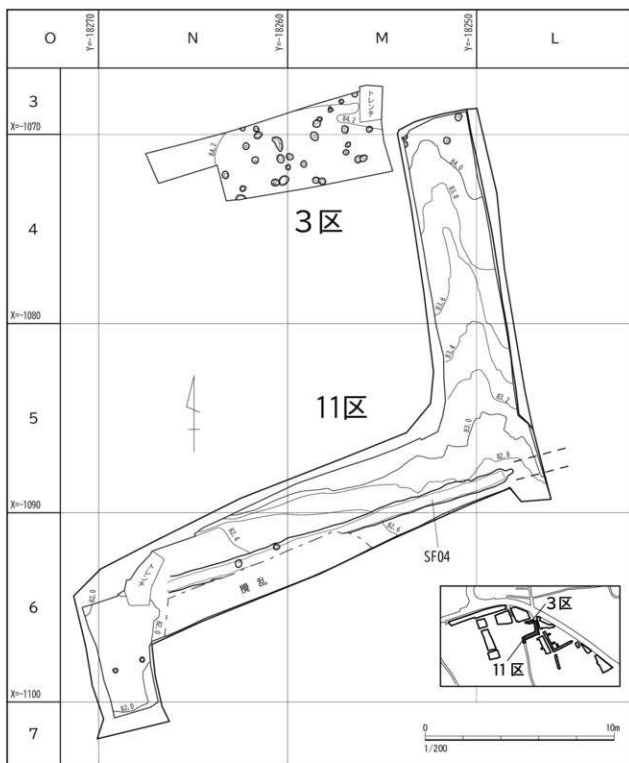
第3図 調査区全体図



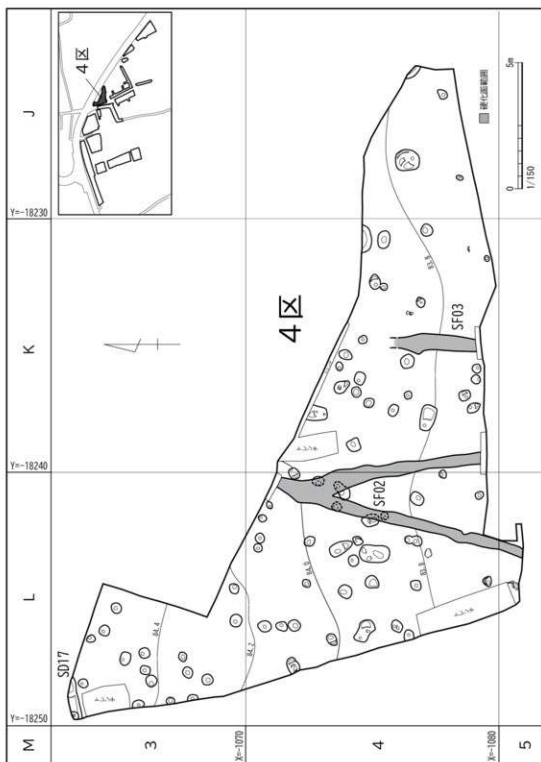
第4図 1区遺構配置図



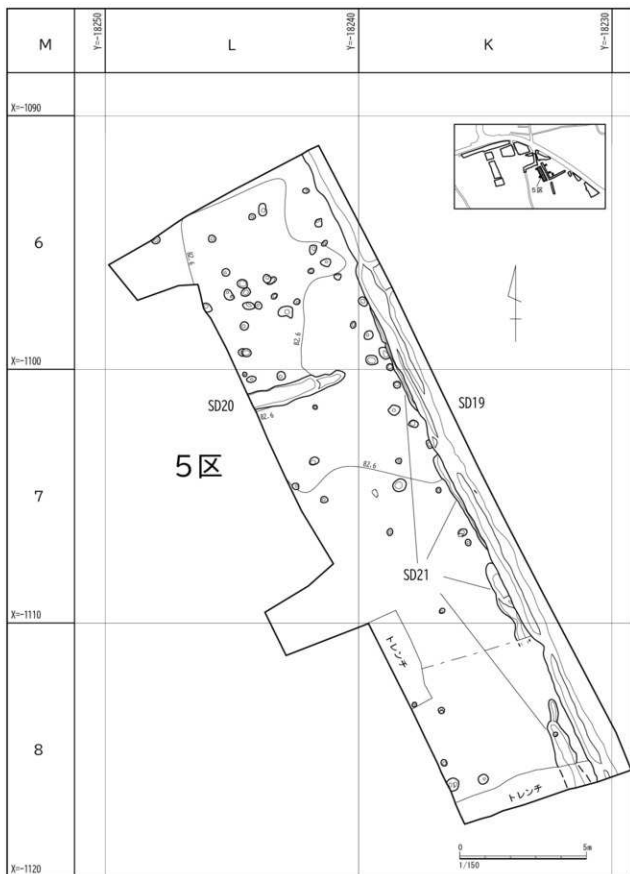
第5図 2区遺構配置図



第6図 3・11区遺構配置図

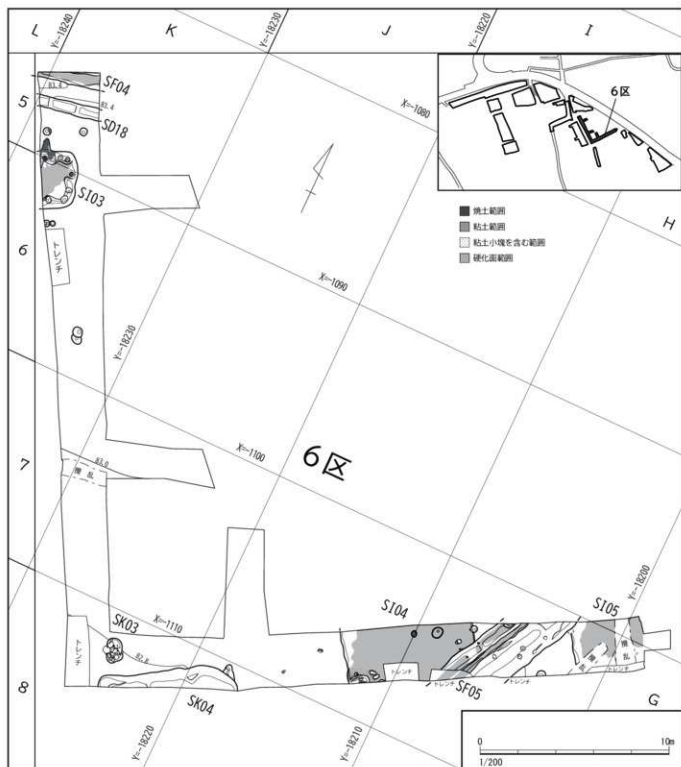


第7図 4区遺構配置図

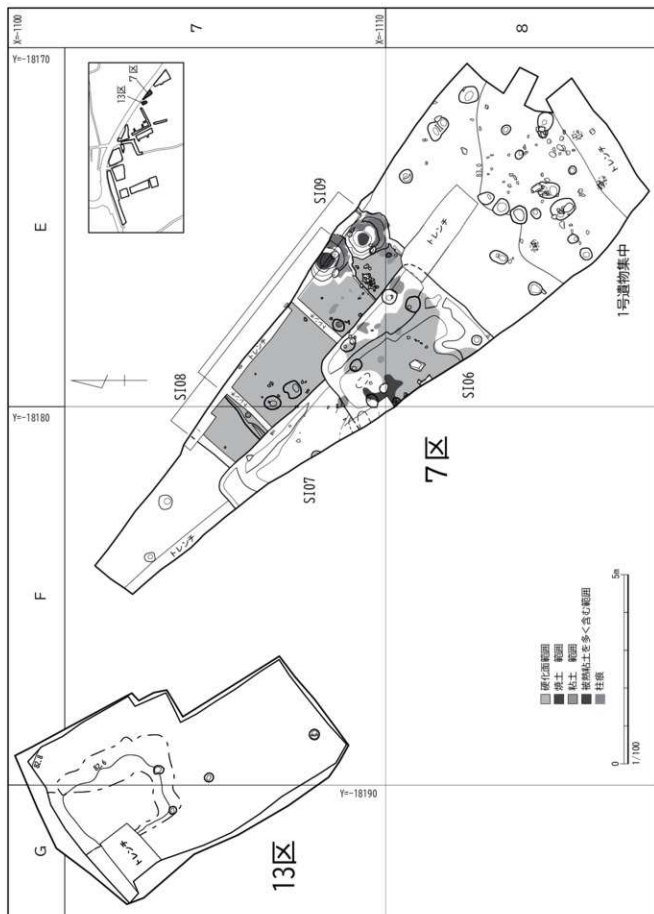


第8図 5区遺構配置図

玉祥寺遺跡

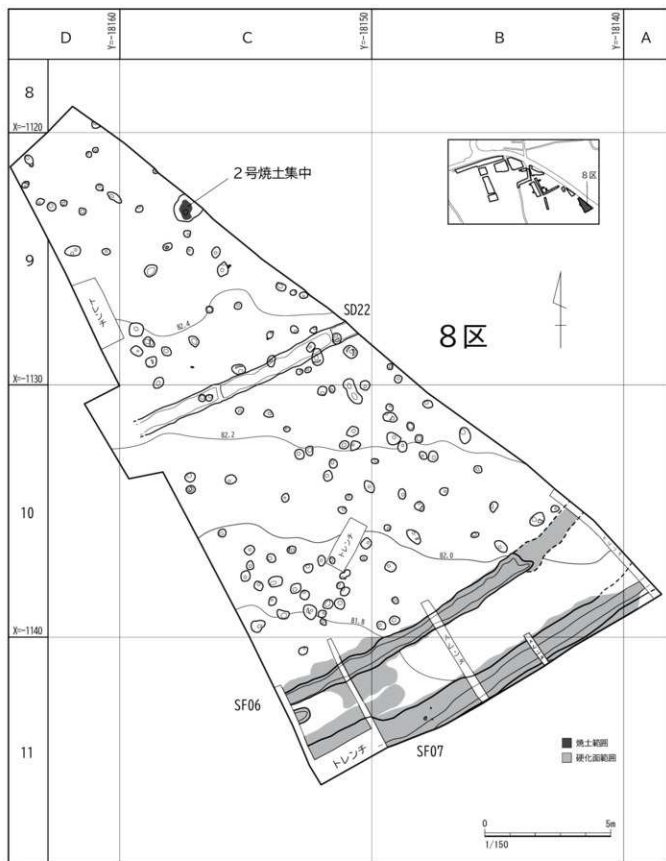


第9図 6区遺構配置図

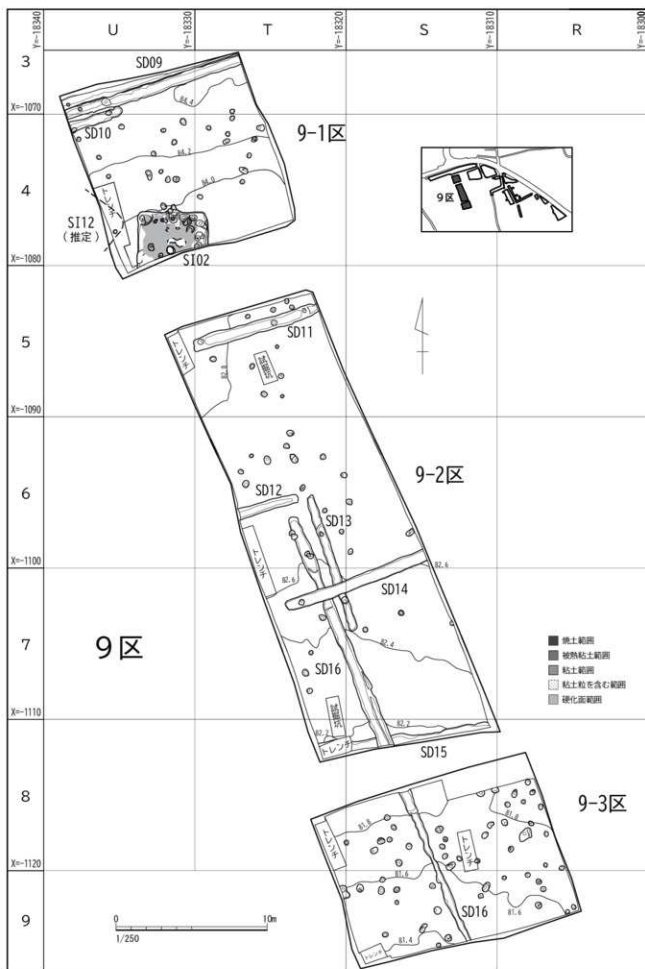


第10図 7・13区遺構配置図

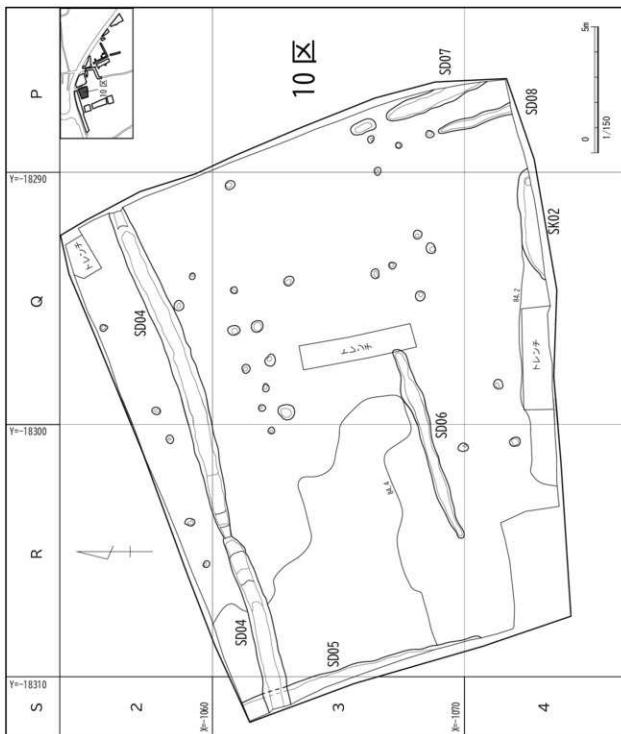
玉祥寺遺跡



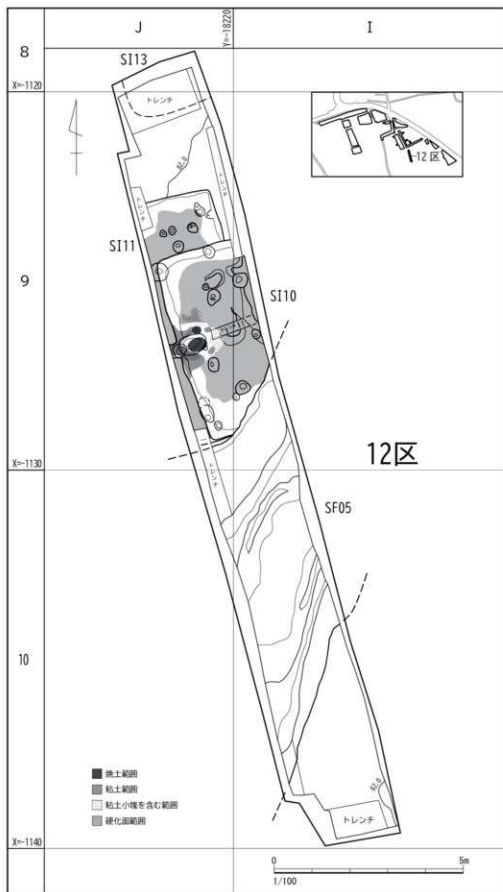
第11図 8区遺構配置図



第12図 9区遺構配置図



第13図 10区遺構配置図



第14図 12区遺構配置図

玉祥寺遺跡

第3節 調査の成果

調査によって竪穴建物、道路状遺構、溝状遺構などを検出した。竪穴建物は古代、道路状遺構と溝状遺構は主に中世以降と時代が分かれている。道路状遺構、溝状遺構は調査区をまたがって検出されたものもあるため、調査区ごとではなく遺構の種別ごとに報告を行い、調査区は遺構番号の後ろに明記した。

竪穴建物

SI01（1区）【第15図】

平面形は隅丸方形で東西に5.3mを測る。南側は調査区外であり、北側1/4程を検出した。床面までの深さ0.2m、掘方の深さ5cm。床面は全体的に硬化しており、硬化面の厚みは2cmを測る。主柱穴2基を確認した。北側壁中央にカマドが設けられる。カマド袖内4箇所支柱設置の痕跡がみられる。袖の粘土やカマド堀方の土には焼けた粘土小塊が多くみられ、別のカマドの土を再利用した可能性がある。掘方から出土した炭化材より1325±20yBP（暦年較正結果によれば、7世紀後半～8世紀代に相当）の数値が得られている。カマド西側袖部分から鉄製紡錘車が出土した。

SI01出土遺物【第19図】

古代の土師器3点とカマド西側袖部分から出土した鉄製紡錘車1点を図化した。

- 1は土師器の環である。器壁はやや厚く、丸味をもって立ち上がる。底部のヘラ切り痕はナデ消され、外面に赤色顔料が塗布される。
- 2・3は土師器の甕である。
- 2は小型のもので、口縁端部は短かく外反し、胴部～底部は丸みを帯びる。口縁部内外面に煤が付着する。
- 3は口縁部が強く外反し、胴部は丸味を持って膨らむ。
- 4はカマド袖部分より出土した鉄製紡錘車の紡輪と紡茎である。使用時のように紡輪に紡茎が装着された状態で出土しており、鏽によって癒着している。

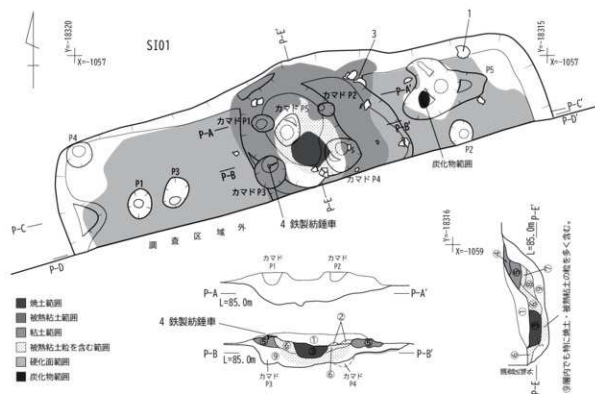
SI02（9区）【第16～18図】

平面形は隅丸方形で東西に4.7mを測る。主軸方向はほぼ真北で、南側は調査区外である。床面までの深さ0.2m、掘方の深さ6cm、床面は全体的に硬化しており、硬化面の厚みは2cmを測る。カマドは北側壁中央に設けられ、土台部分の補強のためか、粘土塊の外側にはよくしまる黒褐色土がみられる。カマド内には土師器壁の胴部片や扁平な礫がみられ、カマド周囲には支柱の痕跡か皿状の浅い窪みがみられる。また、カマド西側より鉄滓が出土した。床面北東部に一部凹凸の激しい箇所がある。

SI02出土遺物【第20図】

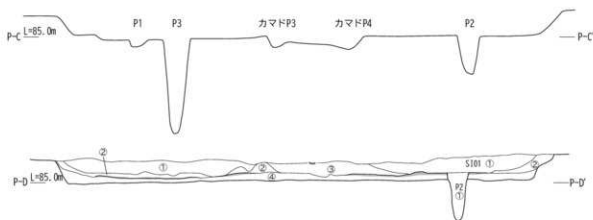
古代の土師器3点と石器1点を図化した。

- 5は土師器の塊でハの字形に開く低い高台をもつ。底部はヘラ切り底で、高台を貼り付けた際のナデが顕著である。
- 6・7は土師器の鉢である。
- 6は浅鉢状を呈する。厚みのある口縁部は外反し、胴部～底部は薄手で丸味をもつ。外面全体に煤が付着しており、被熱による破損と考えられる箇所がみられる。
- 7は口縁がわずかに内湾する。外面から焼成後穿孔を試みている。外面全体～口縁部内面まで赤色顔料を塗布するほか、外面の一部に煤が付着する。
- 8は輝石安山岩製の打製石斧で両側縁が平行な短冊形（長方形）を呈する。SI02埋設時に混入したものである。



S101カマド東西、南北断面

- ①層-黒褐色土 きめ細かく、ややしまる。焼土・粘土・被熱粘土(棕色)粒を含む。
- ②層-暗褐色土 きめが粗く、しまりなし。焼土粒・被熱した粘土塊を多く含む。
- ③層-棕色土 きめがやや粗く、しまりなし。焼土粒・被熱粘土塊を多く含む。黒褐色の硬くしまる小土塊が混入する。[カマド燃焼部]
- ④層-暗灰黄色土 きめがやや粗く、しまる。やや粘質。細かな焼土・粘土の粒を含む。
- ⑤層-灰色土 きめが粗く、しまる。暗褐色土小塊・焼土・被熱粘土(棕色)小塊を含む。[カマド粘土]
- ⑥層-暗褐色土 きめがやや粗く、ややしまる。被熱粘土小塊が多く含む。炭化物が少量混入する。
- ⑦層-暗褐色土 きめが粗く、ややしまる。焼土・被熱粘土・粘土の粒を含む。
- ⑧層-棕色土 きめがやや粗く、しまる。細かな焼土粒・被熱粘土・粘土の粒を含む。
- ⑨層-黒褐色土 きめがやや粗く、しまる。細かな焼土粒・被熱粘土・粘土の粒を含む。



S101東西断面

- ①層-黒褐色土 きめがやや粗く、しまりなし。細かな焼土・粘土の粒を少量含む。
- ②層-暗褐色土 きめが粗く、しまる。小塊・褐色土塊が層かに混入する。
- ③層-黒褐色土 きめがやや粗く、ややしまる。カマド由来の焼土・粘土の粒を含む。
- ④層-灰褐色土 きめが細かく、硬くしまる。上面は床面で全体的に硬化。焼土を少量含む。[壁方]

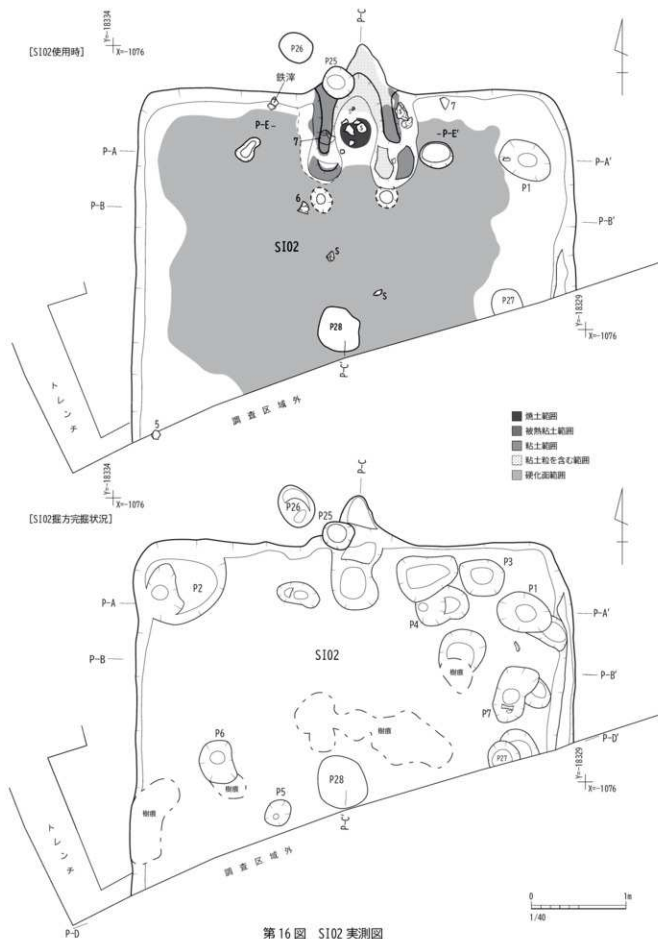
P2

- ①層-黒褐色土 きめが細かく、しまりなし。焼土・粘土・クロニリ土塊を含む。



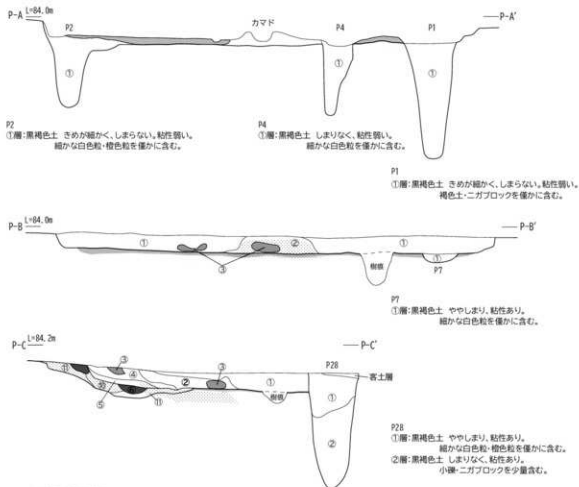
第15図 S101実測図

玉祥寺遺跡



第16図 S102実測図

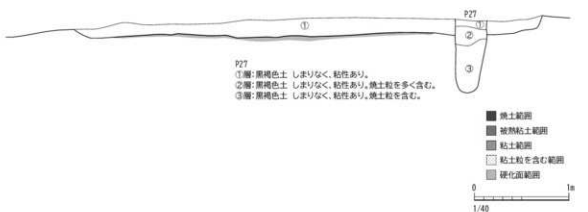
[S102東西断面図]



S102東西、南北断面

- ①層:黒褐色土 ややしまり、粘性あり、細かい粘土・焼土の粒を少量含む、小礫が僅かに混入する。
- ②層:黒褐色土 ややしまり、粘性あり、細かい粘土粒を多く含む、焼土・炭化物・砂・小礫が僅かに混入する。(S102カマド周辺層位)
- ③層:濃い黄褐色粘土 やしまる、焼熱成分を含む、砕けたカマド粘土のブロック・細かい焼土・炭化物・小礫が混入する。
- ④層:黒褐色土 ややしまり、粘性あり、焼土・粘土の粒・炭化物を僅かに混入する。
- ⑤層:黒褐色土 しまりなく、粘性あり、細かい焼土・粘土・焼熱粘土を含む。
- ⑥層:褐色土 やしまる、焼土を多く含む。【焼熱部】
- ⑦層:黒褐色土 よくしまり、粘性あり、細かい焼土と・焼土ブロックを含む。
- ⑧層:暗褐色土 さめが細く、やしまる、粘性あり。
- (7)空層:空層はカマド裏側参照)

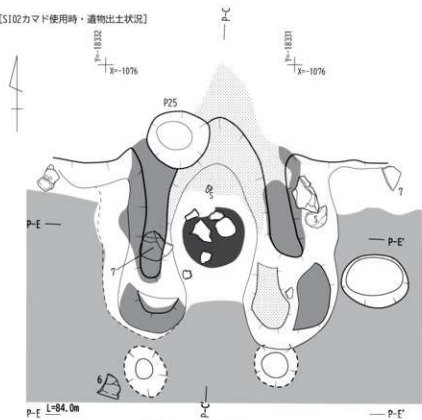
p-d L=84.2m



第17図 S102土層断面図

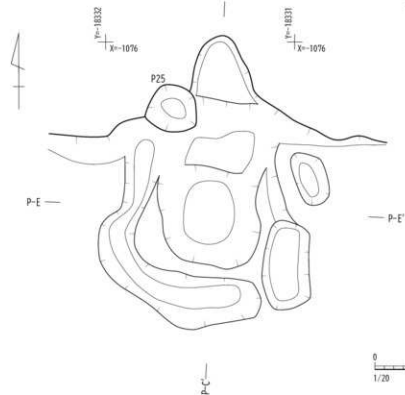
玉祥寺遺跡

[S102カマド使用時・遺物出土状況]



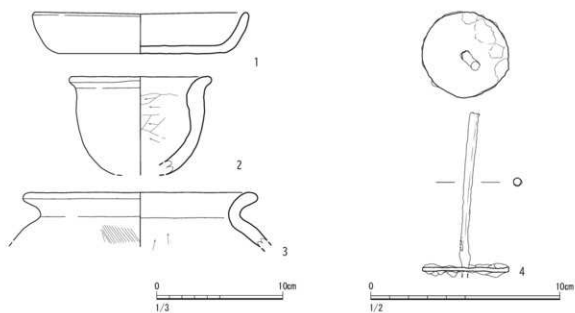
S102カマド断面
 ①層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒から粘土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ②層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ③層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ④層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑤層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑥層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑦層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。

[S102カマド掘方完成状況]

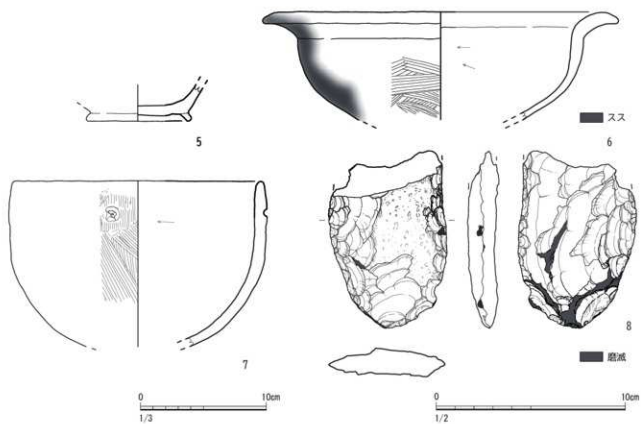


①層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒から粘土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ②層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ③層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ④層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑤層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑥層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。
 ⑦層 黒褐色土 土の層が厚く、やや硬い。黒褐色土・焼土粒の小塊が少量混入する。

第18図 S102カマド実測図



第19図 SI01出土遺物実測図

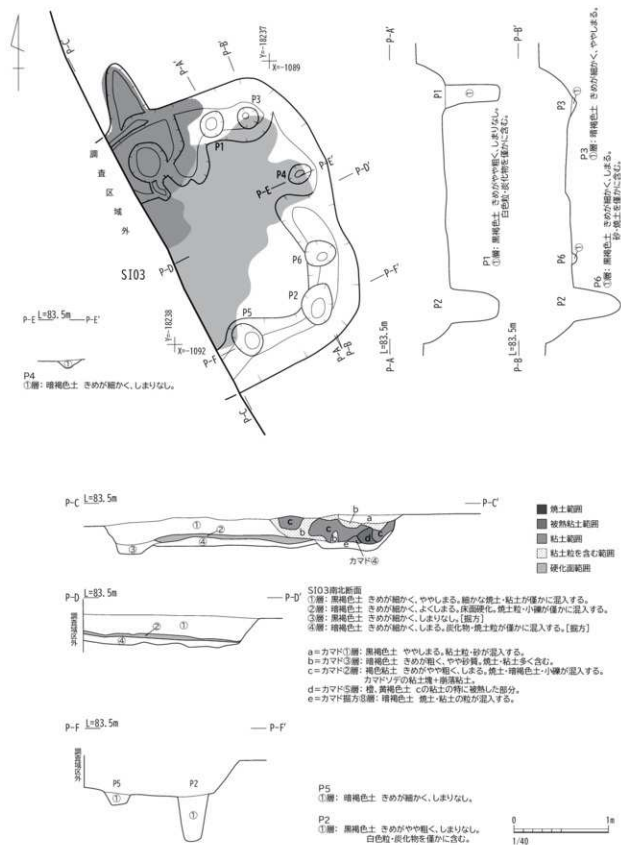


第20図 SI02出土遺物実測図

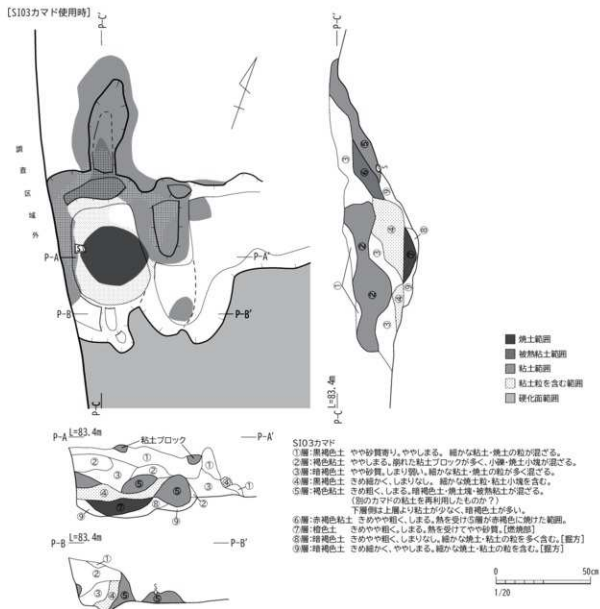
SI03 (6区)【第21・22図】

平面形は隅丸方形で南北に3.6mを測る。床面までの深さ0.15m、掘方の深さ0.15mを測る。西側1/2は調査区外であり、北側壁中央にカマドが設けられる。床面は南東側以外硬化面がみられ、厚みは6cmを測る。

五祥寺遺跡



第 21 図 S103 実測図



第22図 S103カマド実測図

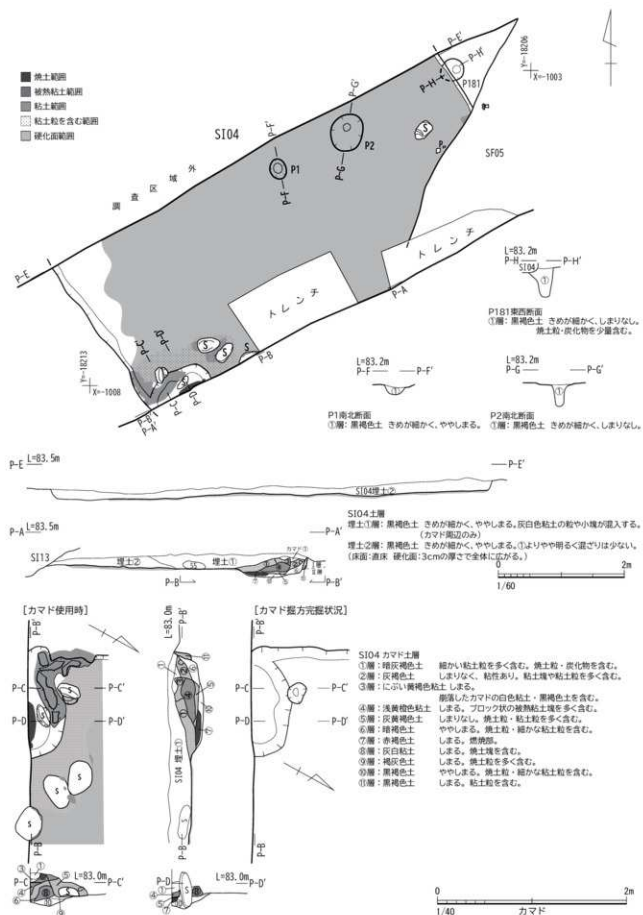
S104 (6区) 【第23図】

東西に7mを測る大型の建物。床面までの深さ0.1m、掘方の深さ0.2m。南・北側は調査区外であり、東側はSF05に切られている。床面は直床で全体的に硬化しており、硬化面の厚みは3cmを測る。カマドは西側壁に設けられ、粘土内に支柱の痕跡がみられた。カマド周辺からは扁平な円礫を複数出土した。カマドに使用されたと考えられる粘土がカマド逆側の床面に散らばっていたことから、建物が廃棄された際にカマドを破壊したと考えられる。

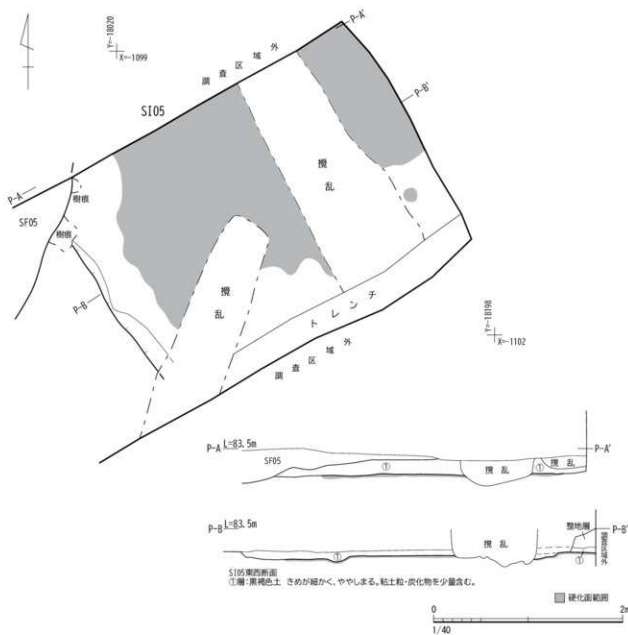
S105 (6区) 【第24図】

南北に2m、東西に3mを測る。S104と同様に大型の建物の可能性もあるが、西側壁を含む一部を残し大半が調査区外であり、攪乱やSF05にも切られているため詳細は不明である。床面までの深さ0.15m。確認できた床面はほぼ直床で全体的に硬化しており、硬化面の厚みは2cmを測る。西側のS104と主軸方向を同じくする。

玉祥寺遺跡



第23図 S104実測図



第24図 SI05実測図

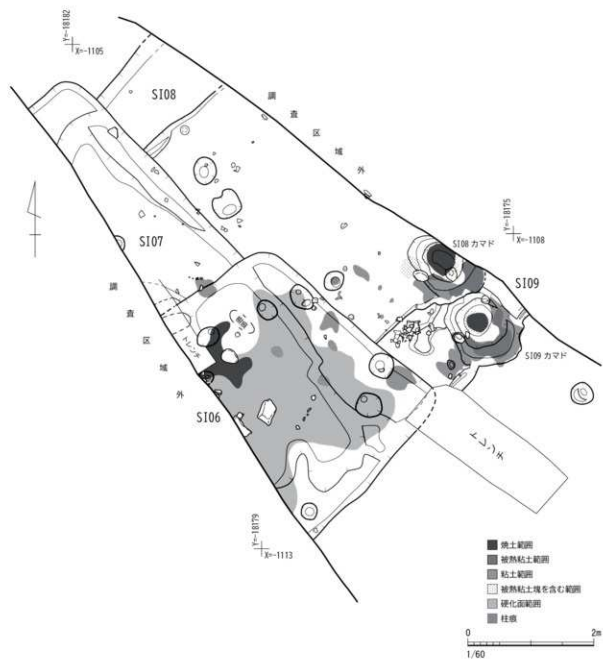
SI06～SI09実測図【第25図】

7区のSI06～SI09は4棟が切り合った状態で検出された。切り合いの状況から、古い順にSI09→SI08→SI07→SI06と建て替えられている。出土遺物から8世紀後半～9世紀の時代が想定され、それぞれの建物に時期差はあまりないと考えられる。

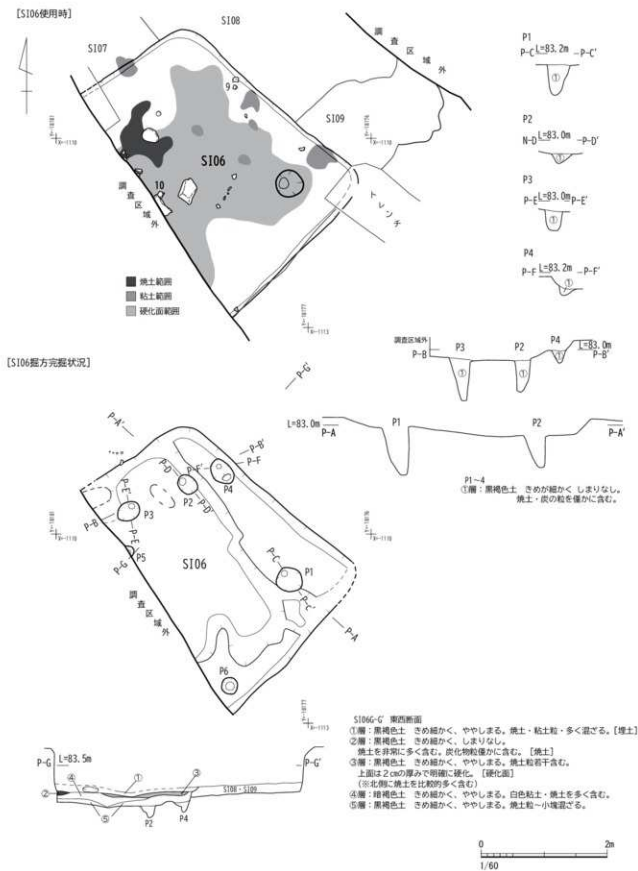
SI06 (7区)【第25・26図】

北西～南東に4.3mを測る。切り合うSI06～SI09の4棟の内、最も新しく、最も狭い建物である。南西側は調査区外であるため検出できなかったが、床面が焼け焼土粒も集中しているため、北西側中央壁にカマドを持つと推測される。床面までの深さ0.1m、掘方の深さ0.2m、床面は広範囲で硬化しており、硬化面の厚みは2cmを測る。遺構内に台石と考えられる礎が複数みられた。

玉祥寺遺跡

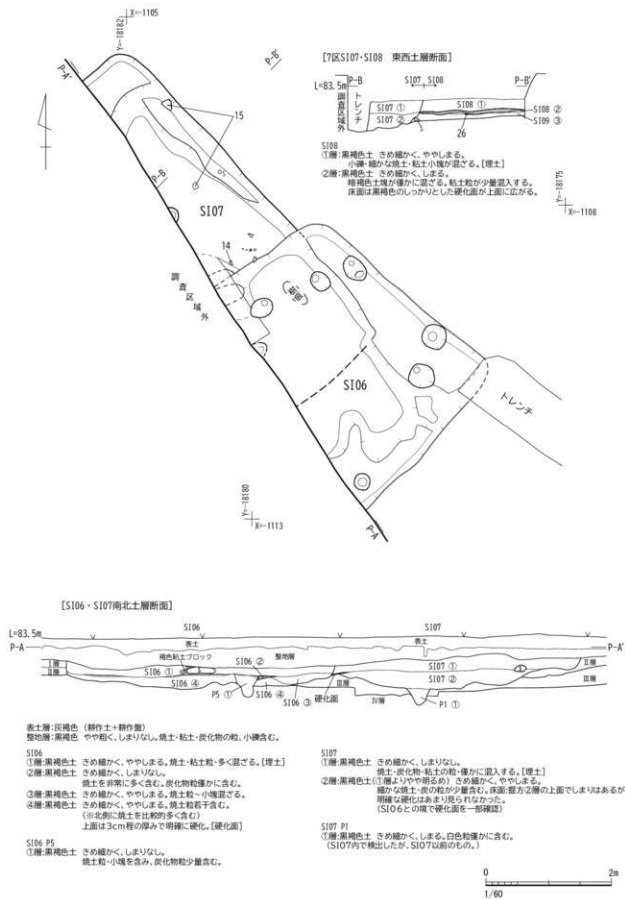


第25図 SI06～SI09実測図

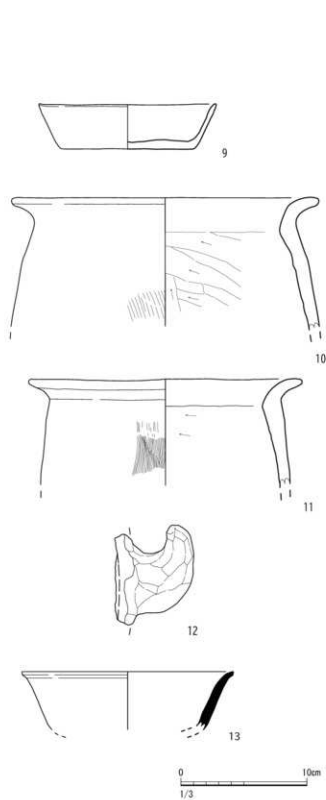


第26図 S106 実測図

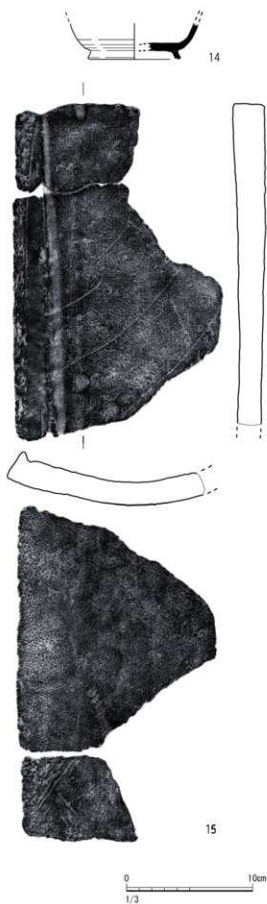
玉祥寺遺跡



第 27 図 S107 実測図



第 28 図 S106 出土遺物実測図



第 29 図 S107 出土遺物実測図

玉祥寺遺跡

SI06 出土遺物【第28図】

古代の土師器4点と須恵器1点を図化した。

9は土師器の坏で体部は直線的に立ち上がる。底部のヘラ切り痕はナデ消される。

10・11は土師器の甕である。

10は外反する口縁をもち、口縁端部が丸く仕上げられる。外面～口縁部内面まで赤色顔料を塗布し、外面には一部煤が付着する。

11は外反する口縁部をもち、外面は非常に細かいハケメで調整される。外面に煤が付着する。

12は土師器の把手である。粘土塊を先端が反る形状に成形し、甕または甕などの胴部に指で強く押し付けて貼り付けている。カマド側にあたる下面に煤が付着する。

13は須恵器の甕と考えられる。体部は少し広がりながら立ち上がり、口縁端部付近で弱く外反する。

SI07 (7区)【第25・27図】

平面形は隅丸方形で北西-南東へ6.2mを測る。西側は調査区外でありカマドの有無は不明である。切り合うSI06～SI09の4棟の内3番目に古い。南東側をSI06に切られているが、南東側プランは掘方で推定した。床面までの深さ0.1m、掘方の深さ0.25mを測る。床面はあまり硬化しておらず、硬化面の厚みはわずかであった。北側にステップをもち、昇降用とも考えられる。布目瓦片を出土した。

SI07 出土遺物【第29図】

古代の須恵器1点と瓦1点を図化した。

14は須恵器の甕である。胎土が精緻でよく焼き締まる。腰部はヘラ削りされる。器形より時期は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

15は平瓦である。内面に一部布目圧痕が確認されるが、ヘラ状のものでナデ消される。側縁部には分割面の調整痕が見られる。

SI08 (7区)【第25・30・31図】

北西から南東へ6.1mを測る。SI06～SI09の4棟の内2番目に古く、東側は調査区外で西側はSI06、SI07に切られる。床面までの深さは0.2m、掘方の深さは0.1mを測り、床面は全体的に硬化し、硬化面の厚みは2cmを測る。南東側にカマドを検出したが、カマド基部は黒褐色土に焼土・被熱した粘土を多く混ぜており、別カマドの粘土を再利用したとも考えられる。

SI08 出土遺物【第32図】

古代の土師器3点、須恵器1点、瓦1点を図化した。

16は土師器の坏である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや尖る。摩耗が著しいが、底部にヘラ切り痕が残る。

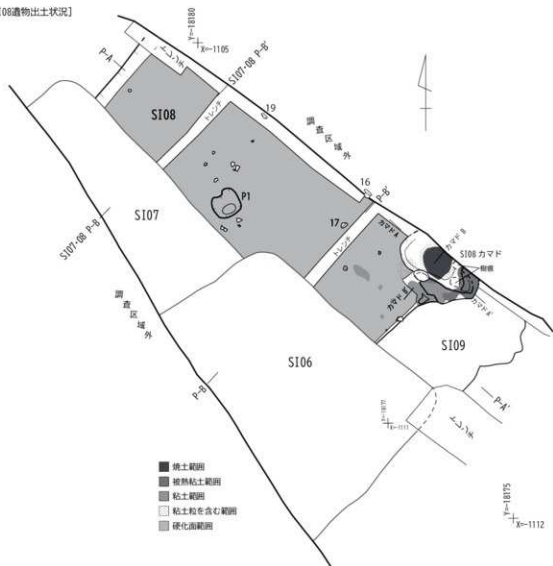
17・18は土師器の甕である。

17は外反する口縁部とやや丸みを帯びる胴部上半部である。外面全体～口縁部内面まで赤色顔料を塗布する。口唇はやや屈曲する。時期は8世紀後半頃と考えられる。

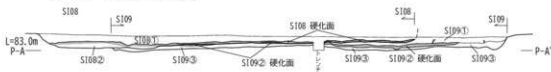
18は外反する口縁部と丸みを帯びる胴部上半部である。外面全体～口縁部内面まで煤が付着する。時期は8世紀後半頃と考えられる。

19は、須恵器の坏の蓋である。天井部低く平らに近くなり、外面はヘラ削りで成形され、ヘラによると考えられるキズが一部に残る。7世紀前半頃のものか。

[S108遺物出土状況]



[7区 S108・S109 南北土層断面図]



[7区 S106・S108・S109 東西土層断面図]



- S108
 ①層: 黒褐色土 きの細かく、ややしまる。
 小レキ・細かな焼土・粘土小塊が混ざる。
 ②層: 黒褐色土 きの細かく、しまる。
 厚褐色土塊が混ざり、粘土粒が少量混入する。
 床面(上面)はしっかりとした硬化面が厚く広がる。

- S109
 ①層: 黒褐色土 きの細かく、しまりなし。
 細かな焼土・粘土・灰化物の粒が混入する。
 ②層: 黒褐色土 きの細かく、明確に硬化(S108と一部融合)
 白色粘土小塊が多く混入し、焼土・白色粒・橙色粒を含む。[硬化面]
 ③層: 黒褐色土 きのやや粗く、ややしまる。
 白色粘土粒が強かに混入する。[敷方]

第30図 S108実測図

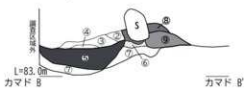
玉祥寺遺跡

【S108カマド遺物出土状況】

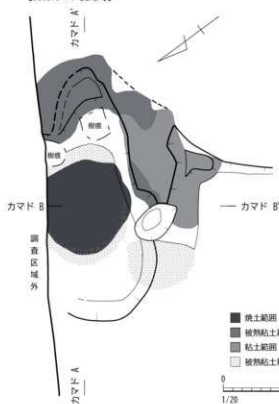


S108 カマド断面

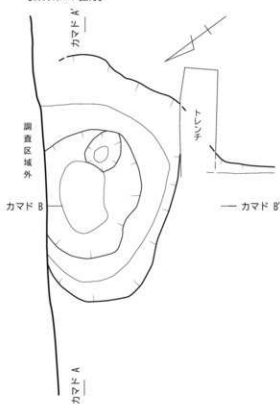
- ①層-暗褐色土 きめ細かく、ややしまる。黄土小塊・細かな粘土の粒が混入する。
- ②層-暗褐色土 きめ細かく、しまりなし。厚れた粘土の粒を多く含む。
- ③層-黒褐色土 きめ細かく、ややしまる。黄土小塊を含む。
- ④層-褐色砂質土 きめ粗く、ややしまる。5cm前後の黄土塊・細かな褐色粘土を多く含む。
- ⑤層-褐色土 やや砂質。きめがやや粗く、ややしまる。【燃焼部】
- ⑥層-褐色土 きめ粗く、しまる。環状に焼土が混入する。
- ⑦層-黄褐色土 きめ粗く、しまる。粘土の粒を含む。【カマド能力】
- ⑧層-黒褐色土 きめ細かく、しまる。赤褐色・黄土小塊を多く含む。
- ⑨層-褐色粘土 きめが粗く、しまる。暗褐色土が混入する。



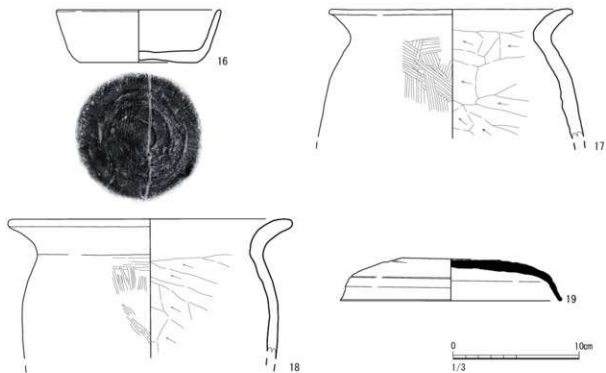
【S108カマド使用時】



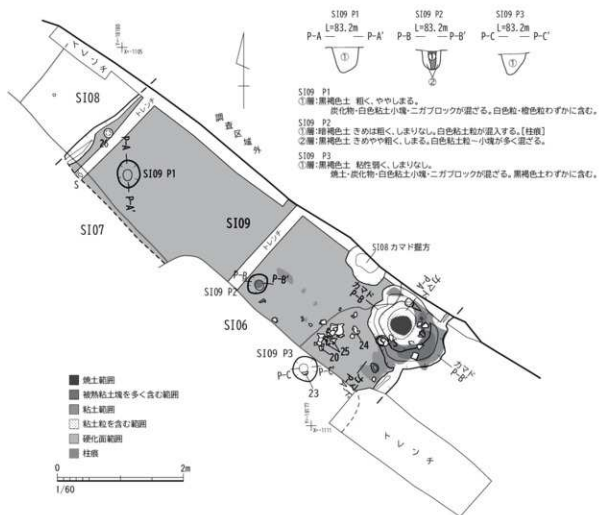
【S108カマド塵力】



第31図 S108カマド実測図



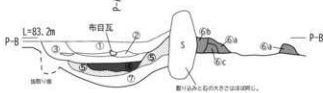
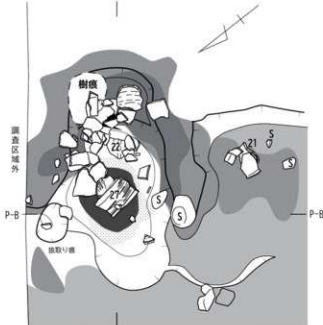
第 32 図 S108 出土遺物実測図



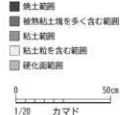
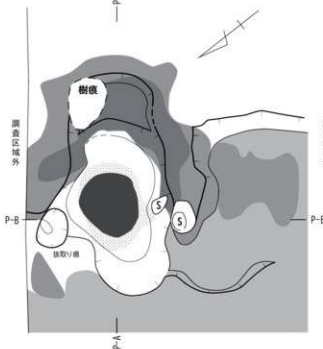
第 33 図 S109 実測図

玉祥寺遺跡

[S109カマド遺物出土状況]



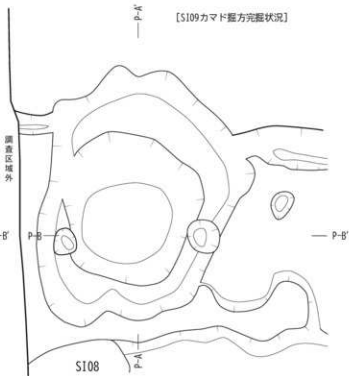
[S109カマド使用時]



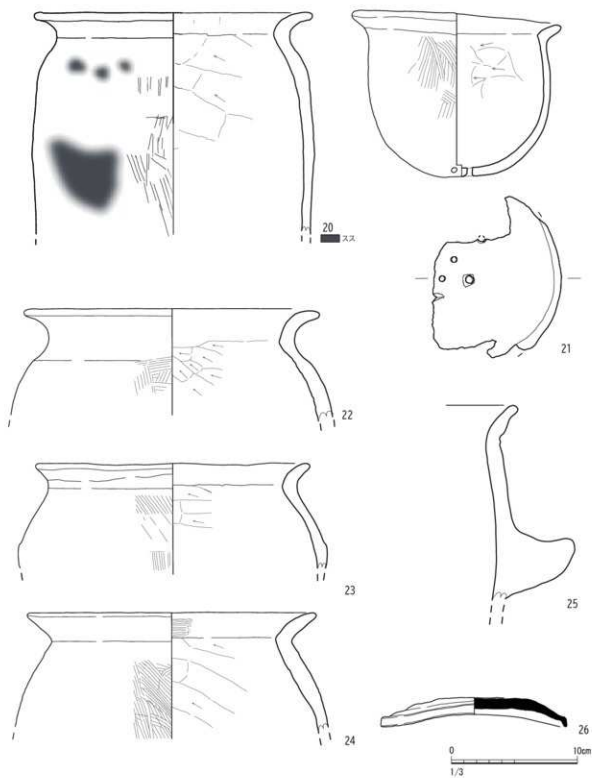
S109カマド断面

- ① 層：黒褐色土
きめがやや粗く、ややしる。焼土が混ざる。細かな粘土の粒を多く含む。
- ② 層：に濃い黄褐色粘質土
きめが粗く、ややしる。黒褐色土塊・細かな焼土塊を含む。布目瓦出土。
- ③ 層：に濃い褐色砂質土
細かな焼土・粘土の粒・砂を多く含む。
- ④ 層：褐色土
きめ粗く、しる。焼土を含む。(埋埋型)
- ⑤ 層：褐色土
きめがやや粗く、ややしる。焼土の粒を多く含む。
- ⑥ a層：褐色粘土
めが粗く、しる。被熱粘土小塊・褐色土が混ざる。
- ⑥ b層：褐色粘土
きめが粗く、しる。被熱粘土小塊・褐色土が混ざる。
- ⑥ c層：埋埋褐色土
きめが粗く、しる。被熱粘土小塊・褐色土が混ざる。
- ⑦ 層：黒褐色土
きめがやや粗く、ややしる。細かな焼土・粘土を含む。

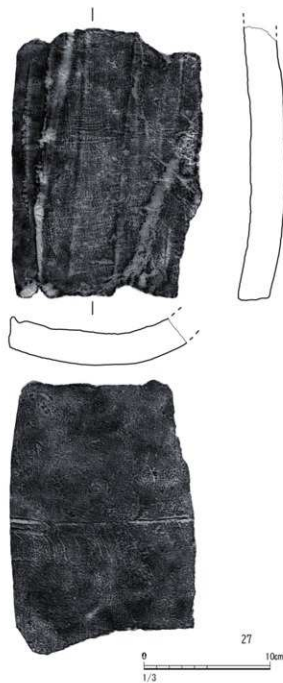
[S109カマド断面完露状況]



第34図 S109カマド実測図



第 35 図 S109 出土遺物実測図①



第36図 SI09出土遺物実測図②

SI09 (7区) 【第25・33・34図】

北西から南東へ6.3mを測る。SI06～SI09の4棟の内最も古く、SI06～SI08に切られている。床面までの深さ0.1m、掘方の深さ0.1mを測る。床面は全体的に硬化し、硬化面の厚みは2cmを測る。北西側の平面プランはSI08の下より立ち上がりを確認した。南東側にカマドを持ち、カマド基部はSI08と同様である。カマド燃焼面の10cmほど上から布目瓦片が出土した。袖を含む粘土塊内に土器片を埋設するが、つなぎまたは耐熱・保護材と考えられる。西壁沿い西側・南東壁沿いカマドの両端に側壁溝がみられる。遺構内ビット2では柱痕がみられたが、硬化面下からの検出のためSI09の柱穴ではないと考えられ、詳細は不明だがSI09より古い建物が存在した可能性がある。

SI09出土遺物 【第35・36図】

- 古代の土師器6点と須恵器1点と瓦1点を図化した。
- 20・22・23・24は土師器の甕である。
- 20は膨らみのない胴部をもち、外面には煤が付着する。被熱のためか外壁面は剥離するように欠損する。
- 22は胴部で明瞭な稜をもって屈曲し、胴部は膨らむ。外面はハケメ調整後、丁寧にナデ調整を行う。
- 23は作りがややいびつで、頸部の屈曲の度合いが場所によって異なる。
- 24は口縁部が強く外反し、胴部は膨らみをもつ。器壁は厚く、内面のケズリ、外面のハケメともあまり丁寧ではなく粗雑な印象を受ける。外面～口縁部内面に赤色顔料を塗布する。
- 21は土師器の甎である。カマドより出土した。小型のもので、歪んだ口縁部からやや粗雑な印象を受けるが、底面の穿孔は丁寧に施されている。口縁部は外反し、張りのある胴部とやや平たい底部をもつ。底部の穿孔は焼成前に施され、直径約0.5cm程度ものが4ヶ所残る。被熱や使用のためか、外壁面に剥離や荒れがみられる。
- 25は土師器の甕もしくは甎である。屈曲の弱い口縁をもち、胴部上位付近に粘土塊で成形された把手が貼り付けられる。
- 26は須恵器の坏蓋である。完形で出土した。焼成時のひずみがあり、器高は低く口縁端部はほぼ直角に屈曲し、かえりをもたない。つまみはなく、外面上部は平

垣で切り離し痕が残る。左回りのロクロで成形される。時期は8世紀後半と考えられる。

27は平瓦である。内面に布目痕、側面に分割痕が残る。厚さは均一に仕上げられる。

SI10 (12区)【第37・38・39図】

平面形は隅丸方形で南北に5mを測る。東側1/2は調査区外で、南側はSF05に切られる。SI11を切っている。カマドは西壁中央に設けられ、袖内で袖石・支柱となる石材を埋設したと考えられる小ピットを検出した。カマドの掘り込みの際まで硬化面が続いており、床面形成後カマド掘方を掘削したと考えられる。支柱穴を2基確認した。床面までの深さ0.2m、掘方の深さ0.2mを測り、床面中央部のほぼ全面が硬化し、硬化面の厚みは2cmを測る。

SI10 出土遺物【第40図】

古代の墨書土器1点を図化した。

28は土師器の底部片である。底面に墨書が施されるが文字の詳細は不明である。

SI11 (12区)【第41図】

平面形は隅丸方形で、南北に6.6mを測る。西側は1/2以上調査区外でありカマドの位置は不明。後続するSI10とほぼ主軸を同じくするが、SI10より1.6mほど広い、やや大型の竪穴建物である。支柱穴2基を確認した。床面までの深さ0.3m、掘方の深さ0.1m、硬化面の厚みは4cmを測る。

SI11 出土遺物【第42図】

古代の土師器1点を図化した。

29は土師器地底部片である。内面に赤色顔料を塗布する。高台の貼り付け痕が明瞭に残る。時期は7世紀後半から8世紀前半と考えられる。

SI12・SI13【第43・45図】

調査時には既に削平を受けており、平面プランが確認されなかった竪穴建物も2棟検出された。

SI12 (9-1区)【第43図】

平面プランは確認できず、調査区西側で基本土層確認用に設定したトレンチ（確認調査時のトレンチを利用）の西壁で確認された。床面までの深さ0.15m、掘方の深さ0.2m、硬化面の厚みは2cmを測る。

SI12 出土遺物【第44図】

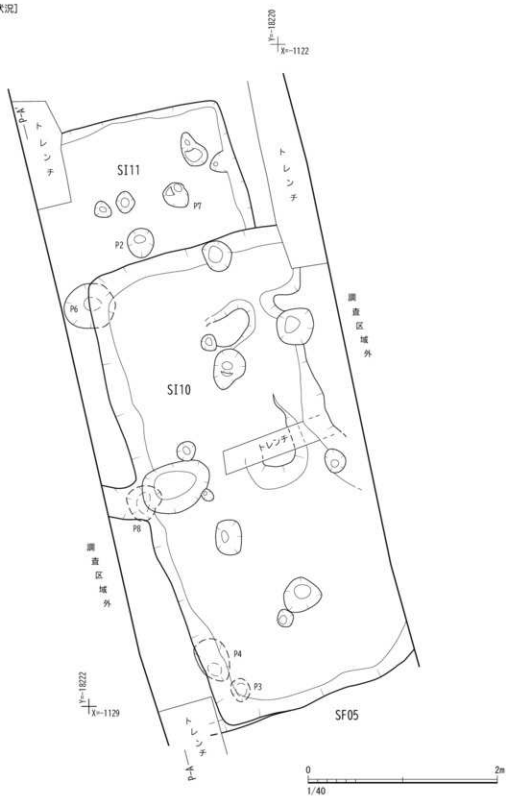
30はヘラ切り底をもつ環で、底面は切り離し後に中心を除きヘラケズリを行う。口縁端部は尖り気味に成形される。SI12内と考えられるピットより出土した。

SI13 (12区)【第45図】

削平により平面プランが確認できず、調査区北側で基本土層確認用に設定したトレンチの北壁で確認された。北側に位置する6区SK04の1層で粘土・焼土がみとめられるため、SK04に切られている可能性がある。床面までの深さ0.2m、掘方の深さ0.25mを測る。西側でカマドの粘土塊を確認した。

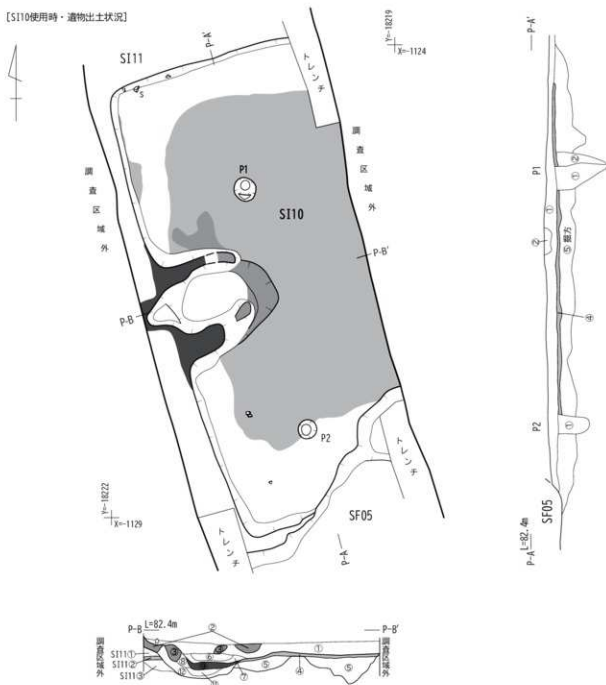
玉祥寺遺跡

[S110・S111完備状況]



第37図 S110・S111実測図

【S110使用時・遺物出土状況】



S110東西・南北断面

- ①層：黒褐色土 しまりなし、粘性あり。細かな焼土・粘土・砂・礫を含む。
- ②層：濃い黄褐色粘土 しまりなし、粘性強い。層内内にカマド土ブロック混入する。
- ③層：濃い黄褐色粘土 しまりなし、粘性強い。②層の中で特に焼土・被焼粘土を多く含む。
- ④層：黒褐色土 かなりしまる。粘性あり。褐色粒を含む。全体的に剛性に硬化。【砂化面】
- ⑤層：黒褐色土 よくしまる。やや粘質。焼土・炭化物・ニガブロックを強かに含む。【掘方】
- ※～⑥層：第39図S110カマド参照

S110 P1

- ①層：黒褐色土 褐色粒・炭化物をやや含む。ニガブロックを含む。
- ②層：黒褐色土 しまりなし。クニガブロック・焼土・炭化物を含む。土師器小片出土。

S110 P2

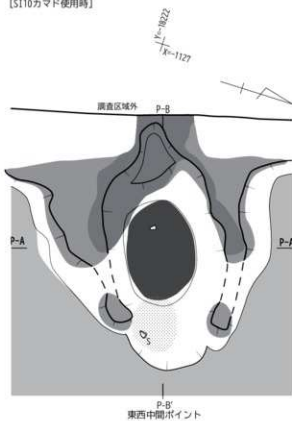
- ①層：黒褐色土 ニガブロックを含む。

- 焼土範囲
- ▨ 粘土範囲
- ▩ 硬化面範囲

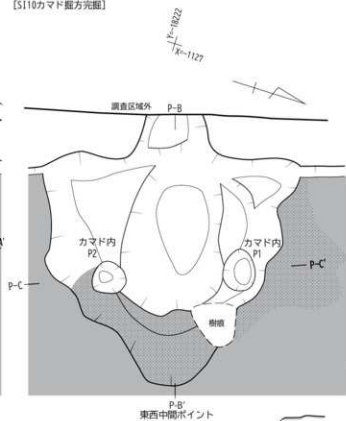
第38図 S110実測図

玉祥寺遺跡

[S110カマド使用時]



[S110カマド壁方完図]



S110カマド南北断面

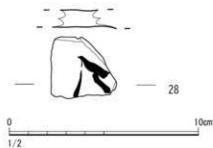
- ①層：黒褐色土、しまりなし。粘性あり。焼土の粒・粘土・砂・礫を含む。
- ②層：にじい黄褐色粘土、ややしまる。粘性強い。カマド粘土ブロックを含む。
- ③層：にじい黄褐色粘土、しまりなし。粘性強い。②層の中で特に焼土・被熱粘土を多く含む。
- ④層～⑤層：黄300(S110参照)
- ⑥層：暗褐色土、しまりなし。粘性弱い。焼土を多く含む。被熱粘土の小ブロックが散在。
- ⑦層：褐色土、粘土粗く、しまりなし。粘性強い。焼土・被熱粘土・粘土の小ブロックを含む。
- ⑧層：暗褐色土、ややしまる。粘性弱い。無定形やや砕骨。焼土に黄褐色土が散在。
- ⑨層：暗褐色土、しまりなし。粘性弱い。焼土・被熱粘土・粘土の粒や小ブロックを多く含む。【燃焼跡】
- ⑩層：暗褐色土、しまりあり。粘性あり。やや粗い。被熱粘土・粘土・二ガブロック・砂を少量含む。
- ⑪層：暗褐色土、ややしまる。粘性あり。焼土・二ガブロックを含む。
- ⑫層：黒褐色土、ややしまる。粘性あり。細かな焼土粒・二ガブロックを含む。

0 50cm

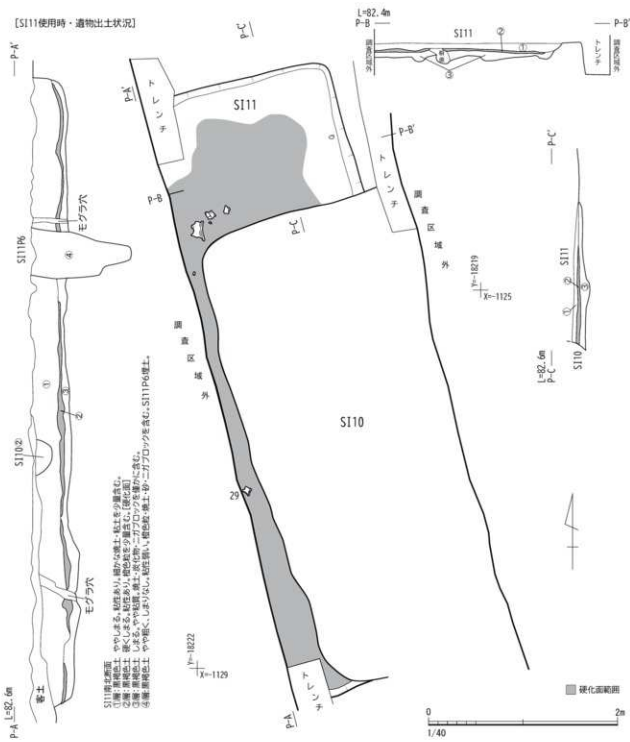
1/20

- 焼土範囲
- 被熱粘土範囲
- 粘土範囲
- 粘土小塊を含む範囲
- 硬化面範囲

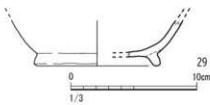
第39図 S110カマド実測図



第40図 S110出土遺物実測図

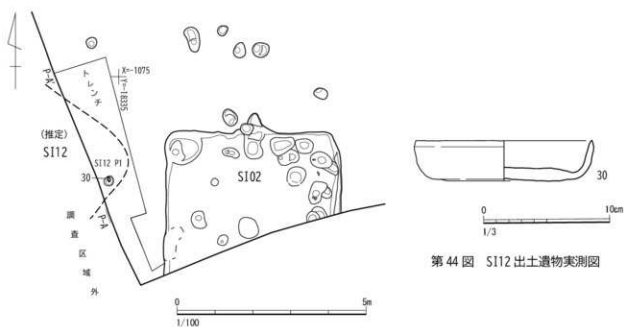


第41図 SI11 実測図

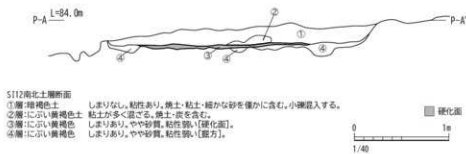


第42図 SI11 出土遺物実測図

玉祥寺遺跡

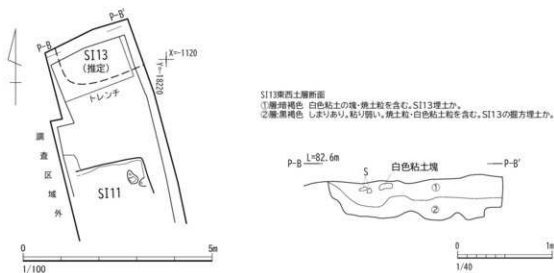


第44図 SI12出土遺物実測図



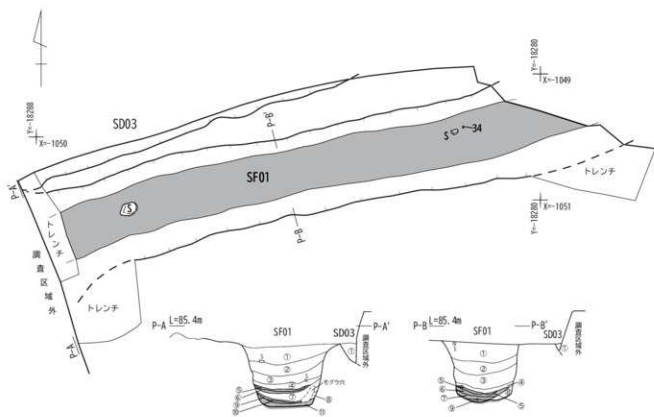
SI12南北土層断面
 ①層 暗褐色土 しまりなし、粘性あり、焼土・粘土・細かな砂を僅かに含む、小礫混入する。
 ②層 濃い黄褐色土 粘土が多く混ざる。焼土・炭を含む。
 ③層 濃い黄褐色土 しまりあり、やや砂質、粘性弱い〔硬化面〕。
 ④層 濃い黄褐色土 しまりあり、やや砂質、粘性弱い〔腐方〕。

第43図 SI12実測図



SI13東西土層断面
 ①層 暗褐色 白色粘土の塊・焼土粒を含む、SI13埋土か。
 ②層 黄褐色 しまりあり、粘性弱い、焼土粒・白色粘土粒を含む、SI13の腐方埋土か。

第45図 SI13実測図



SF01南土層断面

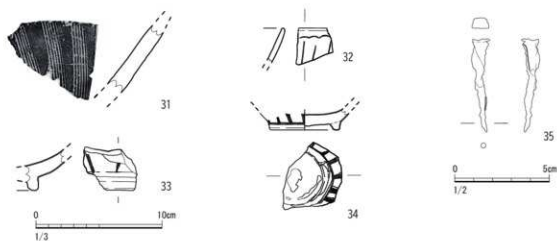
- ①層：黄褐色土 やや砂質、しまりなし。小礫を僅かに含む。
- ②層：黄褐色土 きめが細かく、しまりなし。細砂が混入する。
- ③層：黄褐色土 きめがやや粗く、しまりなし。細砂・小礫が混入する。
- ④層：黄褐色土 きめが細かく、しまりなし。細砂を多く含む。
- ⑤層：褐色粘質土 きめが細かく、よくしまる。
- ⑥層：暗褐色粘質土 きめが細かく、よくしまる。褐色の粘質土が塊状に混入する。硬化面。
- ⑦層：黄褐色粘質土 きめが粗く、しまる。小礫・ニガ小塊が僅かに混入。場所により、しっかりと硬化する。
- ⑧層：褐色粘質土 きめが粗く、しまりなし。
- ⑨層：褐色粘質土 きめが粗く、よくしまる。硬化面。
- ⑩層：暗褐色粘質土 きめが粗く、よくしまる。硬化面。

SD03南北断面

- ①層：灰褐色土 きめが細かく、ややしまる。
- ②層：黄褐色土・白層（ニガ土）の粒・小塊が塊状に混入する。

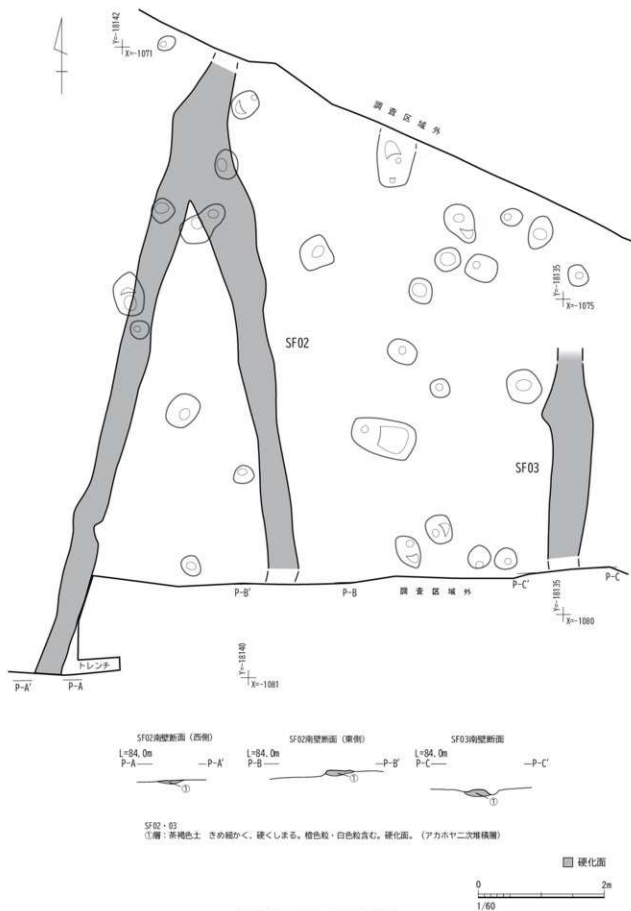


第46図 SF01・SD03実測図

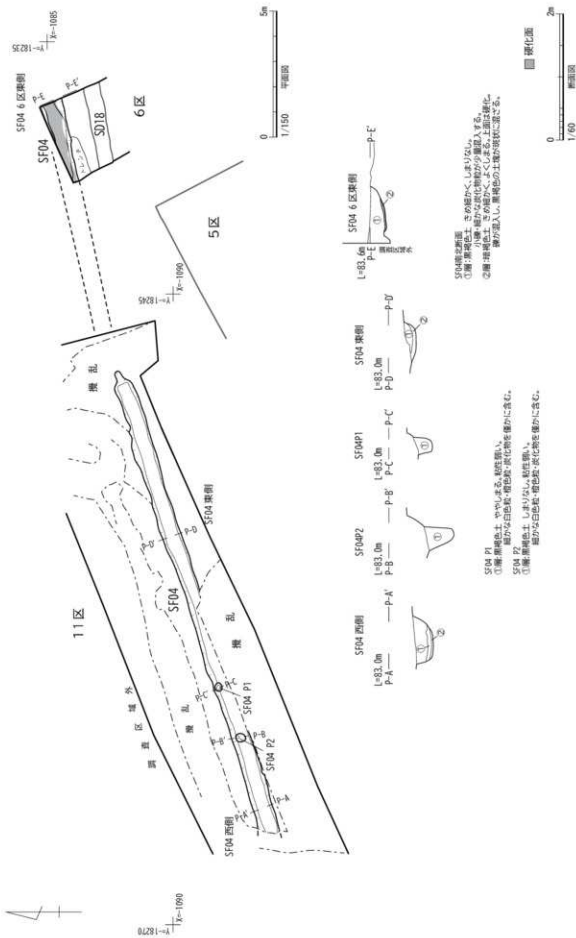


第47図 SF01出土遺物実測図

玉祥寺遺跡



第48図 SF02・SF03実測図



第 49 図 SF04 実測図

玉祥寺遺跡

道路状遺構

SF01 (2区)【第46図】

東北東から西南西方向へ向かって下る、断面逆台形を呈する溝状の遺構。基底部・埋土中から4面の硬化面を確認した。基底部以外の層は流れ込みによる砂を含むため、土が流れ込むたびにそのままとして利用したと考えられる。基底部から青磁片(第47図34)が出土した。

SF01 出土遺物【第47図】

- 31は中世の瓦質土器の播鉢である。6条一単位の播目が内面底部側から左斜め方向に施される。
- 32、33、34は龍泉窯系青磁碗である。
- 32は口縁部である。外面に細線と剣頭からなる簡略化された蓮弁文が施される。15世紀代か。
- 33、34は底部である。ともに外面に蓮弁文がみとめられる。34の高台は低く、畳付まで施軸されている。高台内は蛇の目状に軸割ぎされ、一部に重ね焼きによる癒着がみられる。ともに15世紀代か。
- 35は鉄釘である。断面四角形を呈し、時期は近世以前と考えられる。

SF02 (4区)【第48図】

ほぼ南北方向に延びる硬化面で、途中二又に分岐している。残存長は東側8.6m、西側10.4m、幅は東側0.1m、西側0.5mを測る。西側では深さ0.1mの掘り込みに4cmの硬化面が確認されたが、全体的に上面が削平されているため掘り込みの詳細は不明である。

SF03 (4区)【第48図】

南北方向に延びる残存長3.5m、幅0.8m、厚み0.1mの硬化面である。SF02と同様に本来は掘り込みがあったと考えられるが、上面を削平されているため詳細は不明である。

SF04 (6区・11区)【第49図】

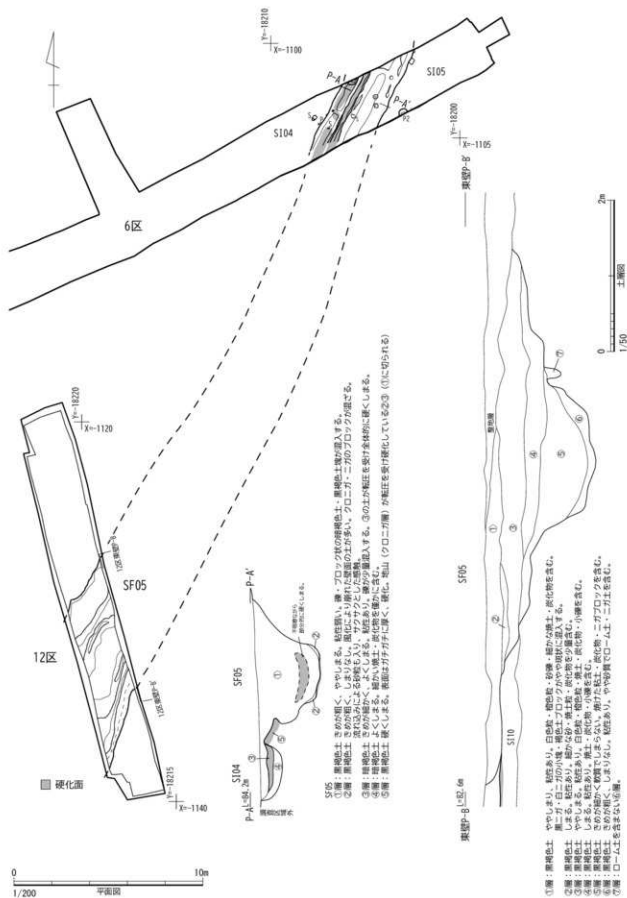
6区と11区にまたがって検出された東北東から西南西へ向かって下る溝状の遺構。農道・用水路により削平されて消失した部分も含め残存長30.45m、幅0.9m、深さ0.3～0.35mを測る。6区側で厚さ2～4cmの硬化面を確認したほか、基底部は全体的によくしまっている。断面U字形を呈するが、東端ではW字状を呈する。

SF05 (6区・12区)【第50図】

北東方向から南西方向へ向かって下る溝状の遺構。残存長41.6m、幅2.7～5m、深さ0.8～1.3mを測る。6区検出部分は断面逆台形を呈し、西側に掘り込みを伴う硬化面とそれらに切られる硬化面がみとめられた。12区検出部分は立ち上がりがステップ状を呈し、底面中央部は土坑状に下がっている。⑤層より出土した炭化材より1285±20年BP(暦年較正結果によれば、7世紀後半～8世紀代に相当)の数値が得られているが、⑤層からは瓦質土器や青磁片も出土しているため、中世以降の遺構と考えられる。

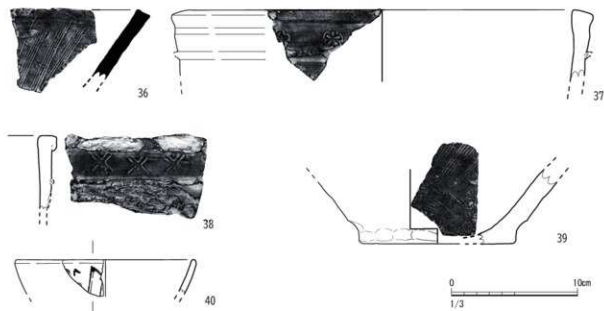
SF05 出土遺物【第51図】

- 36は瓦質土器の播鉢の口縁部である。4条一単位の播目が内面の底部側から右斜め方向に施される。中世のものと考えられる。
- 37、38は中世の瓦質土器の火鉢である。37はやや肥厚した口唇部と1条の貼付突帯の間に花文のスタンプを連続して押している。外面は黒く燻されている。



第50図 SF05実測図

玉祥寺遺跡



第51図 SF05出土遺物実測図

38は肥厚した口唇部と1条の貼付突帯の間にVとXを組み合わせたような文様のスタンプを連続して押している。
39は中世の瓦質土器の槽鉢の底部である。槽目は右斜め方向に施されるが、摩耗が激しく単位は不明である。外面には成形の際の指の圧痕が見られる。
40は龍泉窯系青磁碗である。外面に細線と剣頭からなる簡略化された蓮弁文が施される。15世紀代か。

SF06 (8区) 【第52・53図】

北東から南西へ向かって下る溝状の遺構。残存長14.2m、幅0.7～2.0m、深さ0.2mの浅い掘り込みで3面の硬化面が確認された。新旧関係は不明だが、SF07とほぼ同じ軸で併走している。

SF07 (8区) 【第52・53図】

北東から南西へ向かって下る溝状の遺構。残存長15.3m、深さ0.5mを測り、断面は幅の広い逆台形を呈する。6面の硬化面が確認され、長期間使用されたことがうかがえる。

溝状遺構

SD01 (1区) 【第54図】

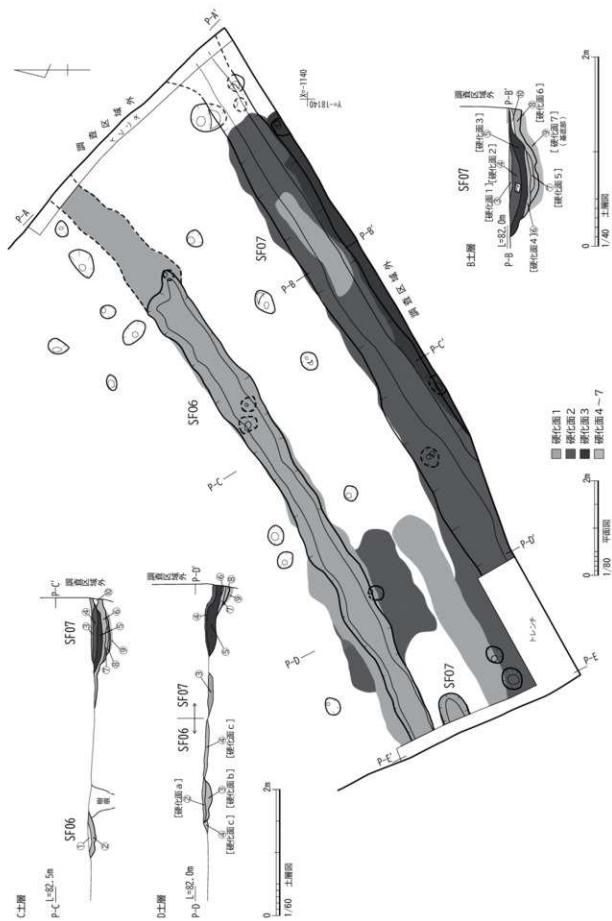
一辺5m程の方形に掘り込まれた溝状遺構と考えられるが、削平されているため一部のみが残存する。残存長は南北方向へ3.2m、東西方向へ4.5mを不連続に測り、幅0.8m、深さ0.2mを測る。

SD02 (1区) 【第55図】

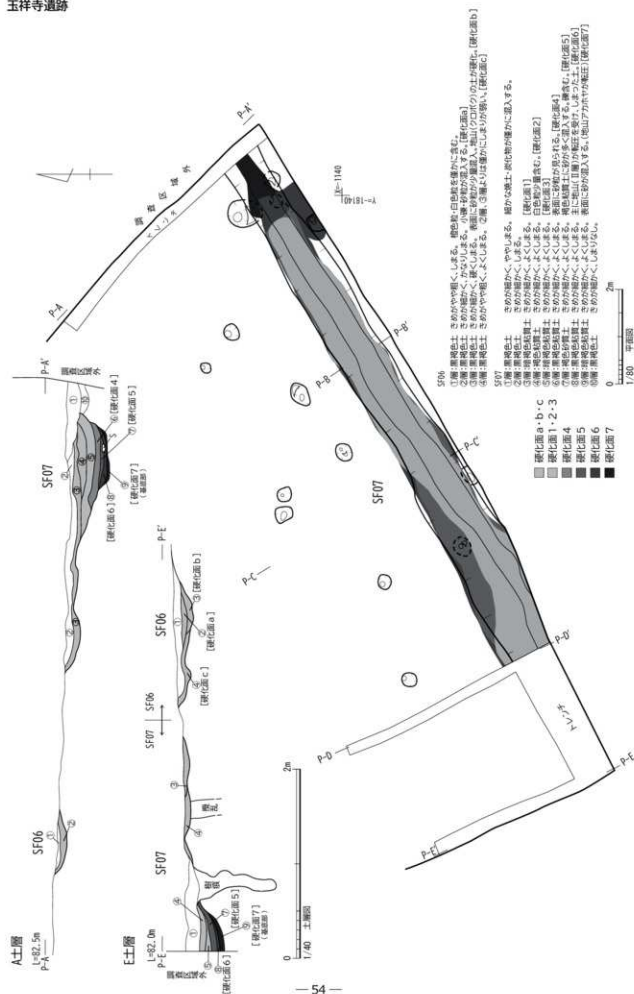
東北東から西南西へ緩やかに下る溝状遺構。残存長4.5m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。

SD03 (2区) 【第46図】

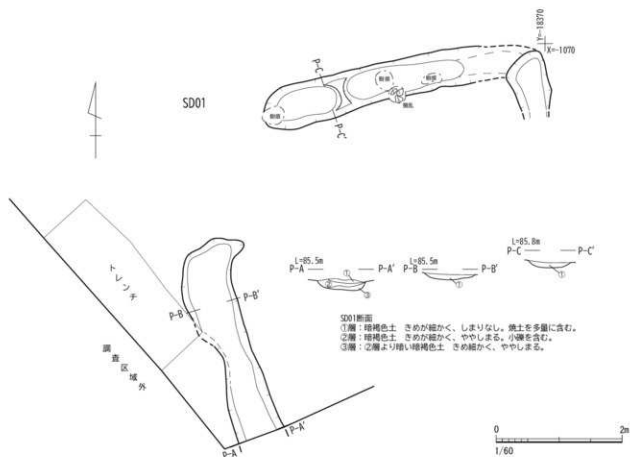
調査区北壁沿いから端部のみ検出された。東北東から西南西へ向かって下る溝状遺構で、残存長5.5mを測る。SF01と併走し新旧関係は不明だが、埋土に小礫等の混ざりが多いため時代の新しい区画溝や道路の可能性がある。



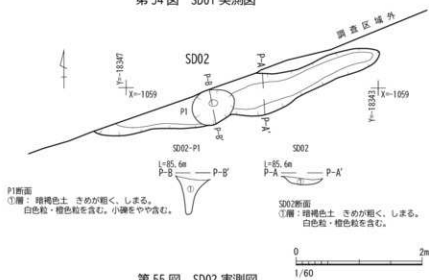
第52図 SF06・SF07美測図①



第 53 図 SF06・SF07 実測図②



- SD01断面
- ①層：暗褐色土 さめが細かく、しまりなし。焼土を多量に含む。
 ②層：暗褐色土 さめが細かく、ややしまる。小礫を含む。
 ③層：②層より細かい暗褐色土 さめが細かく、ややしまる。



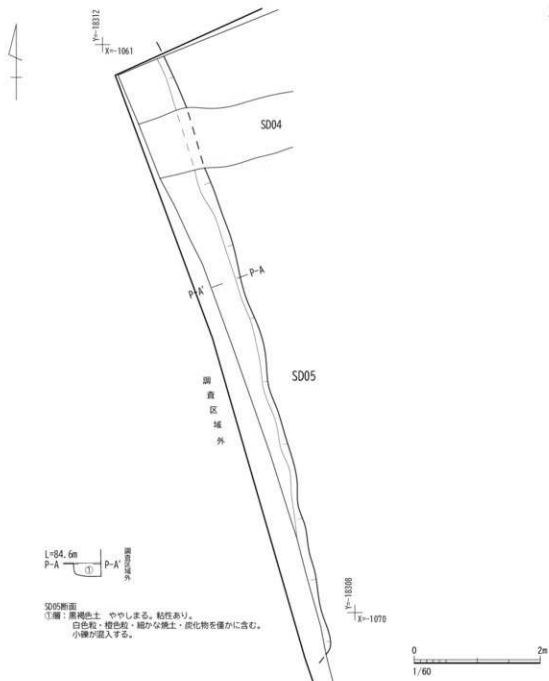
- P1断面
- ①層：暗褐色土 さめが粗く、しまる。
 白色粒・褐色粒を含む。小礫をやや含む。
- SD02断面
- ①層：暗褐色土 さめが粗く、しまる。
 白色粒・褐色粒を含む。

SD04 (10区) 【第56図】

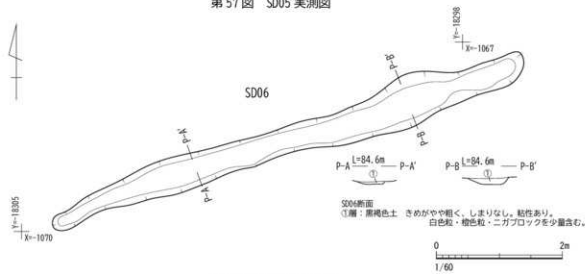
東北東から西南西へ向かって緩やかに下る溝状遺構。残存長 21m、幅 1.0m、深さ 1.3m を測る。途中掘り込みが浅くなる箇所があり、ステップ状の段差をもつ。基底部はかなりしまる。西に位置する 9-1 区 SD09・SD10 は同一遺構の可能性がある。

SD05 (10区) 【第57図】

調査区西壁沿いを北北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。残存長 9.7m、幅 0.8m、深さ 0.2m を測る。SD04 に切られ、削平により上部はほとんど残存していない。

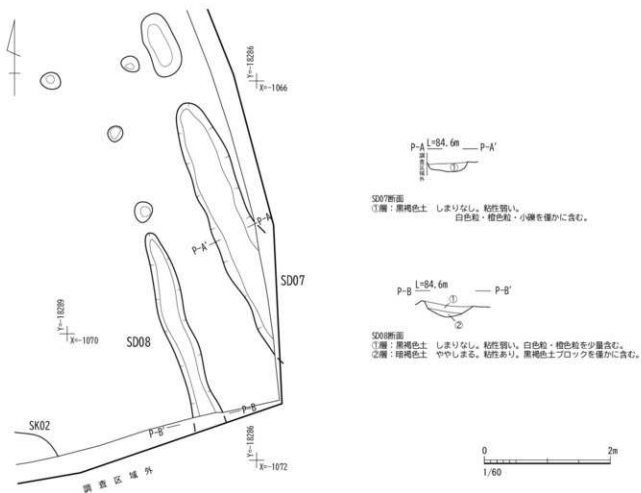


第 57 図 SD05 実測図



第 58 図 SD06 実測図

玉祥寺遺跡



第 59 図 SD07・SD08 実測図

SD06 (10 区) 【第58図】

東北東から西南西に延びる溝状遺構。残存長8m、幅 0.8m、深さ 0.1mを測る。調査区東壁沿いの SD07 とほぼ直角に近い軸方向を示す。

SD07 (10 区) 【第59図】

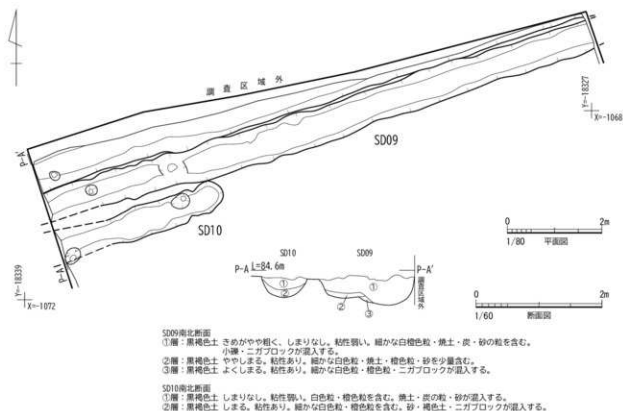
北北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。並走する SD08 とは若干軸が異なる。基底部は硬化までは至らないがよくしまる。残存長 5.8m、幅 0.7m、深さ 0.1mを測る。

SD08 (10 区) 【第59図】

北北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。基底部は硬くしまっている。残存長3m、幅 0.4m、深さ 0.2mを測る。

SD09 (9-1 区) 【第60図】

東北東から西南西へ向かって下る溝状遺構である。残存長 12.2m、幅 1.5m、深さ 0.5mを測る。平面プランでは基底部の重なる 2 条の溝のように見えるが、断面により同一の遺構として扱った。10 区の SD04 と同一遺構の可能性が有る。基底部はそれぞれよくしまっている。



第60図 SD09・SD10実測図

SD10 (9-1区)【第60図】

東西方向に延びる溝状遺構である。残存長3.7m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。SD09とほぼ同軸方向で並走するが、新旧関係は不明である。基底部の形状もよく似ており、同様によくしまっている。10区のSD04と同一遺構の可能性がある。

SD11 (9-2区)【第61図】

東北東から西南西へ向かって緩やかに下る溝状遺構。残存長8.6m、幅0.9m、深さ0.7mを測る。断面はU字形を呈する。東端はステップ状に段差をもち、西端は急激に立ち上がる。

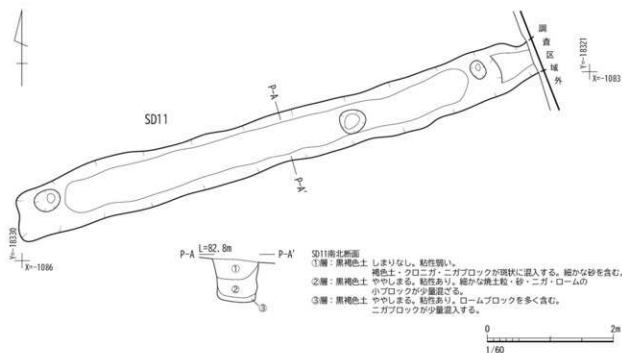
SD12 (9-2区)【第62図】

東北東から西南西へと緩やかに下る溝状遺構。残存長4.2m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。SD11とは主軸方向・断面形状が近い。関係性が高いと考えられる。中世以降の耕作地を区分する区画溝等と考えられる。東端部に大きめの円礫が廃棄される。

SD13 (9-2区)【第62図】

北北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。残存長9.4m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。基底部には10cm程の段差がみられる。併走するSD16と同様にSD14に切られているが、SD16との新旧関係等は不明である。出土した炭化材より 345 ± 20 yBP（暦年較正結果によると15世紀後半～17世紀前半に相当）の数値が得られている。

玉祥寺遺跡



第61図 SD11実測図

SD14 (9-2区) 【第62図】

西南西から東北東に延びる溝状遺構。残存長9.9m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。基底部は平坦に近い。削平により残存しないが、本来はもっと西へ延びていたと考えられる。SD13・SD16を直交する形で切っている。

SD15 (9-2区) 【第62図】

西南西から東北東に延びる溝状遺構である。残存長12m、幅1.1m、深さ0.45mを測る。ほぼ直交するSD16に切られている。

SD16 (9-2区) 【第62図】

9-2区と9-3区をまたいで検出された。北北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。残存長30.4m、幅0.8～1.0m、深さ0.7mを測る。SD14に切られ、SD15を切っている。基底部数ヶ所に段差がみられる。9-2区南端立ち上がりは東側に段をもつ。北端部で牛馬と考えられる獣骨が出土した。部位は頸椎、顎骨、歯と考えられるが残存状況が悪く、ほとんど範囲でしか捉えられなかった。

SD16 出土遺物 【第63図】

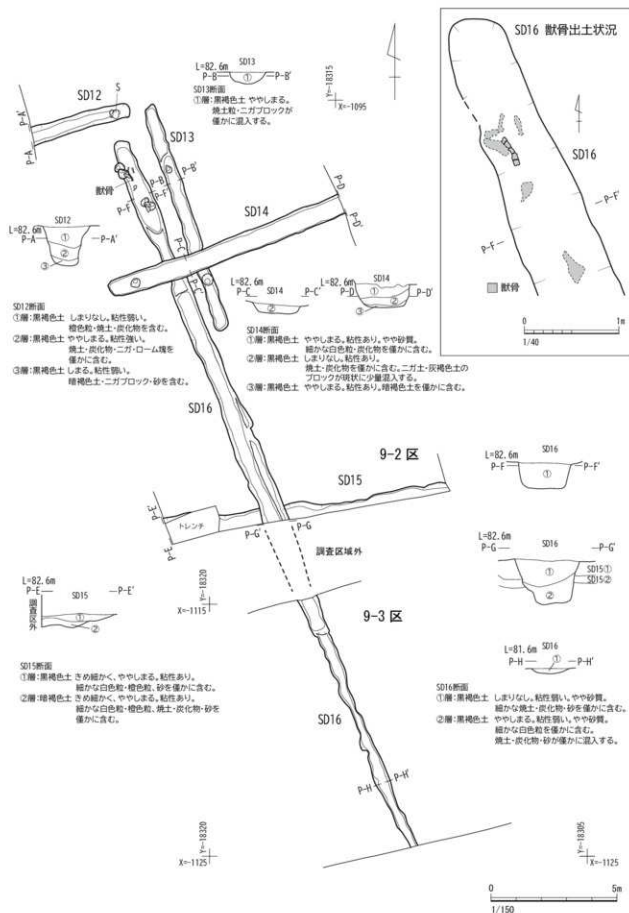
- 41 は土師器の小皿である。底部は糸切底で、見込み縁辺部を強くナデている。
- 42 は中世の瓦質土器の火鉢の口縁部である。竹管のようなもので円文のスタンプを連続して施している。
- 43 は近世の肥前系陶器碗である。内外面に銅緑釉を施すが、外面腰部以下は露胎する。

SD17 (4区) 【第64図】

東北東から西南西へ向かって緩やかに下る溝状遺構。東端で段状に落ちている。残存長1.7m、深さ0.3mを測る。

SD17 出土遺物 【第65図】

- 44 は中世の瓦質土器の播体である。5条一単位の播目が施される。



第 62 図 SD12 ~ SD16、SD16 獣骨出土状況実測図

玉祥寺遺跡

SD18 (6区) 【第66図】

西南西から東北東へ向かって緩やかに下る溝状遺構。残存長3.3m、幅0.7m、深さ0.4mを測る。SF04と併走するが、軸方向が若干異なり硬化面も確認されなかった。基底部分は6cm程の高低差を伴う3段で構成される。

SD19 (5区) 【第67図】

南西から北東に延びる溝状遺構。残存長27.6m、残幅1.4m、深さ0.8mを測る。SD21を切っている。基底部分に段差をもち、一部硬化に近いまわりがみられた。旧整地層と考えられる層を切っているため、比較的新しい遺構と考えられる。ほ場整備等の際に埋められたのか、短期間で埋められている。

SD19 出土遺物 【第68図】

45は古代の土師器坏である。底面はヘラ切り底で、内面に煤が付着している。

46は古代の土師器甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部を丸く仕上げている。

47は中世の土師器皿である。底部は、糸切り底で板目状圧痕が残る。内面はなだらかで胴部から底部まで屈曲をもたない。口縁部に煤が付着しているため、灯明皿と思われる。時期は13世紀後半か14世紀頃と考えられる。

48は土師器の甕か甔の把手である。成形した粘土塊を胴部に貼り付けている。

49は中世の瓦質土器火鉢である。肥厚した口唇部と1条の貼付突帯の間に菊花文のスタンプを連続して施している。貼付突帯下部に波状の櫛描きが残る。内面にハケメが残る。

50は中世の瓦質土器播鉢である。7条一単位の播目が左斜め方向に施される。

51は龍泉窯系青磁碗である。外面に細線と剣頭からなる簡略化された蓮弁文が施される。15世紀代か。

SD20 (5区) 【第69図】

東北東から西南西へ延びる溝状遺構。残存長3.8m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。東端に段をもつ。II層(中世遺物包含層)を掘り込んでいるため、近世の溝と考えられる。

SD21 (5区) 【第67図】

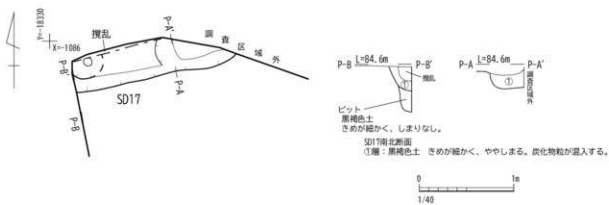
北西から南南東へ向かって下る溝状遺構。削平により不連続だが、現地では同一遺構として扱った。残存長20.8m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。基底部分は硬くしまり、埋土から鉄滓を出土した。SD19に切られている。

SD22 (8区) 【第70図】

北東から南西へ向かって下る溝状遺構。残存長7.2m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。基底部分は5~9cmの段差3段で構成され、徐々に南西へと下る。



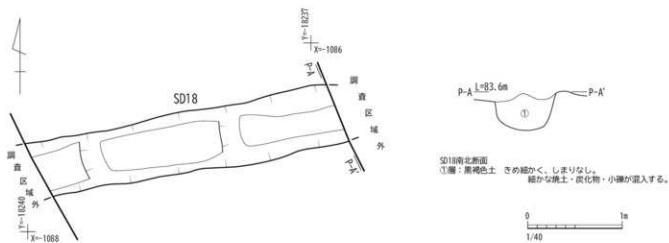
第 63 図 SD16 出土遺物実測図



第 64 図 SD17 実測図

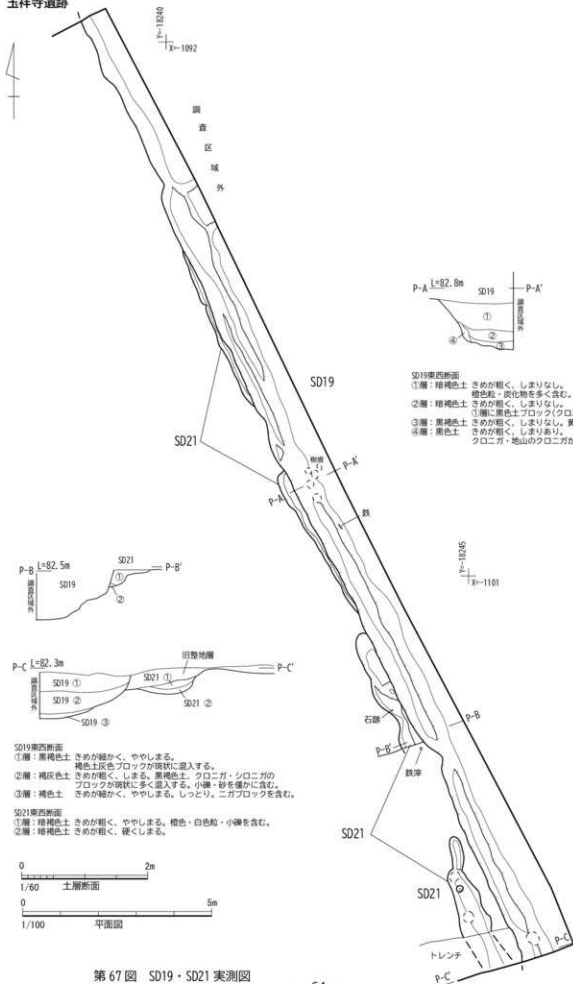


第 65 図 SD17 出土遺物実測図

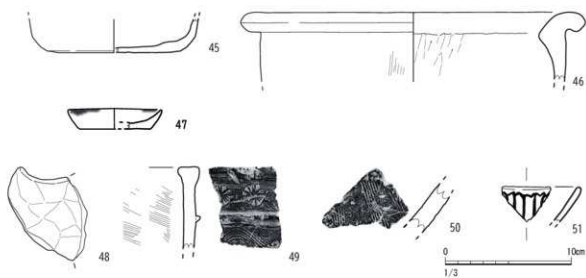


第 66 図 SD18 実測図

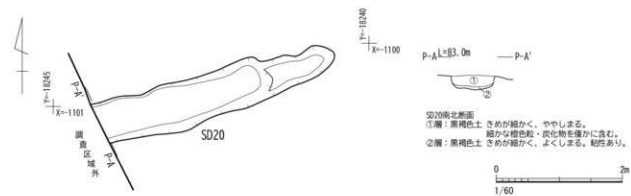
玉祥寺遺跡



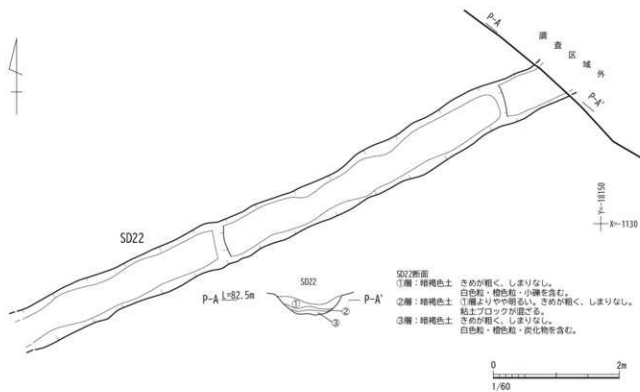
第 67 図 SD19・SD21 実測図



第 68 図 SD19 出土遺物実測図

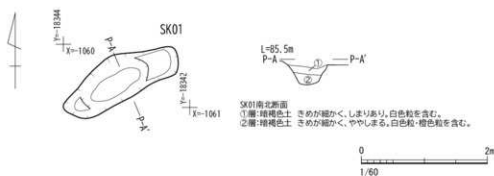


第 69 図 SD20 実測図

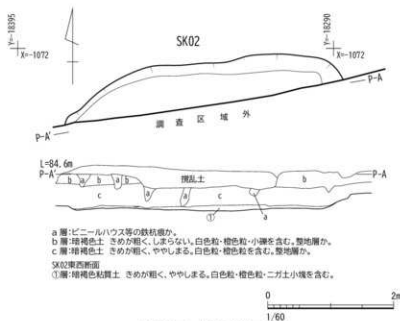


第 70 図 SD22 実測図

玉祥寺遺跡



第71図 SK01 実測図



第72図 SK02 実測図

土坑

SK01 (1区) 【第71図】

長軸1m×短軸0.3mの楕円形を呈する。深さ0.3mを測る。段状に掘り込まれ、長軸方向中央が一段下がる。

SK02 (10区) 【第72図】

調査区端より検出されたため平面プラン、主軸方向は不明。残存長4.5m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。出土した炭化材より1310±20yBP（暦年校正結果によれば、7世紀後半～8世紀代に相当）の数値が得られている。

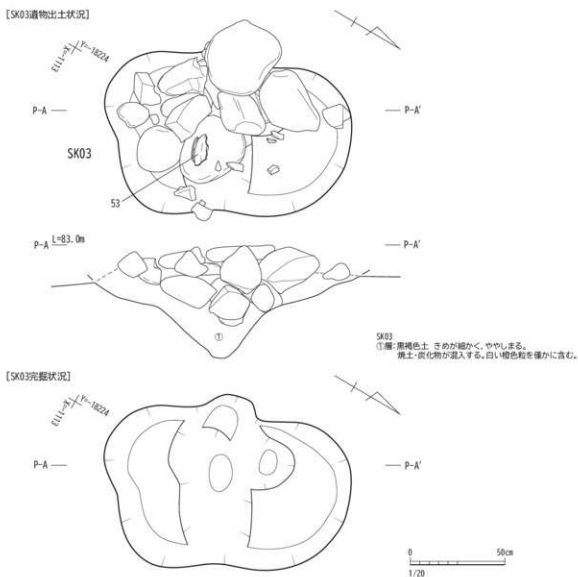
SK03 (6区) 【第73図】

長軸1.3m×短軸0.9mの楕円形を呈する。深さ0.4mを測る落ち込みに土器器片や風化した石材片、砕いた円礫を集積しているが、用途は不明である。

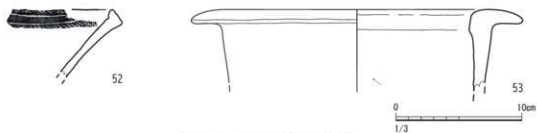
SK03 出土遺物 【第74図】

52は縄文土器である。口縁部に磨消縄文帯をもち2条の沈線が見られる。縄文時代後期後半頃と考えられる。

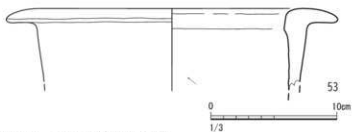
53は古代の土器の甕である。頸部から胴部にかけてやや内側にはいり、口縁部はほぼ直角に外反する。



第73図 SK03 実測図



第74図 SK03 出土遺物実測図



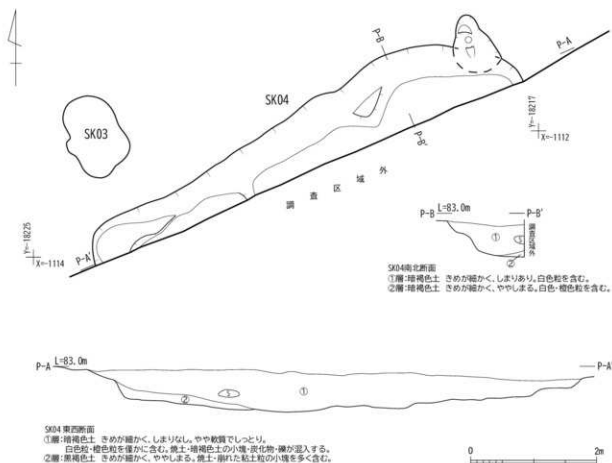
SK04（6区）【第75図】

調査区端で検出されたため平面プランは不明。長さ7.4m、幅1.2m、深さ0.5mを測る落ち込みが調査区外南へと続く。下層にカマド由来と考えられる粘土・焼土粒を含んでおり、12区のS113を切っている可能性がある。

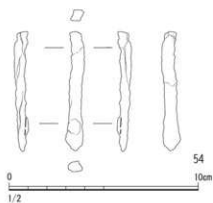
SK04 出土遺物【第76図】

54は鉄製品である。錆が著しく明確ではないが、断面四角形の釘と考えられる。

玉祥寺遺跡



第75図 SK04実測図



第76図 SK04出土遺物実測図

その他の遺構

1号焼土集中(2区)【第77図】

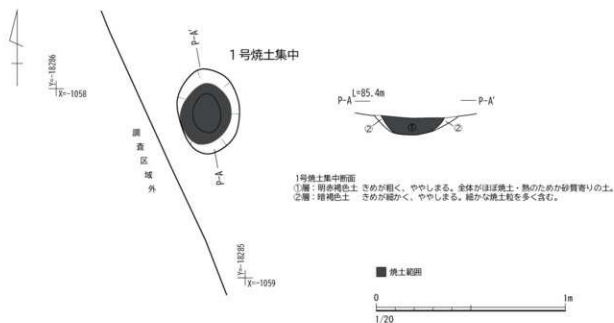
南北方向0.45m、東西方向0.35mを測る。掘り込みを伴わず、焚き火等で地山が焙煎したものと考えられる。

2号焼土集中(8区)【第78図】

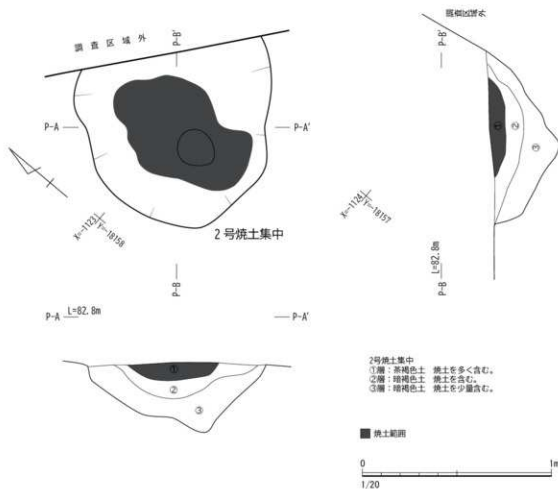
残存幅1mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。時期は不明である。

1号遺物集中(7区)【第79図】

7区E-8グリッド内で布目瓦片、刻書土器など遺物を多数出土した。明確な落ち込み等は確認できていない。

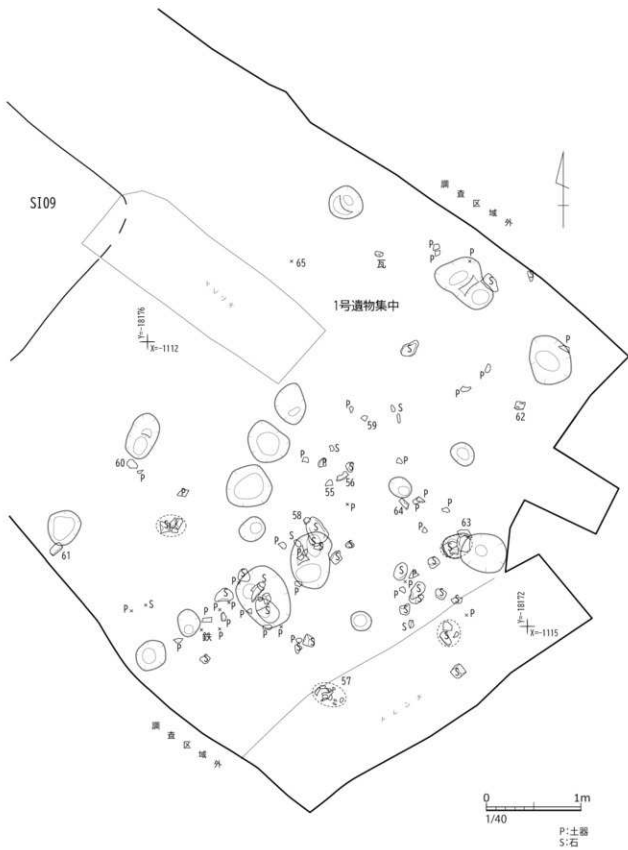


第77図 1号焼土集中実測図

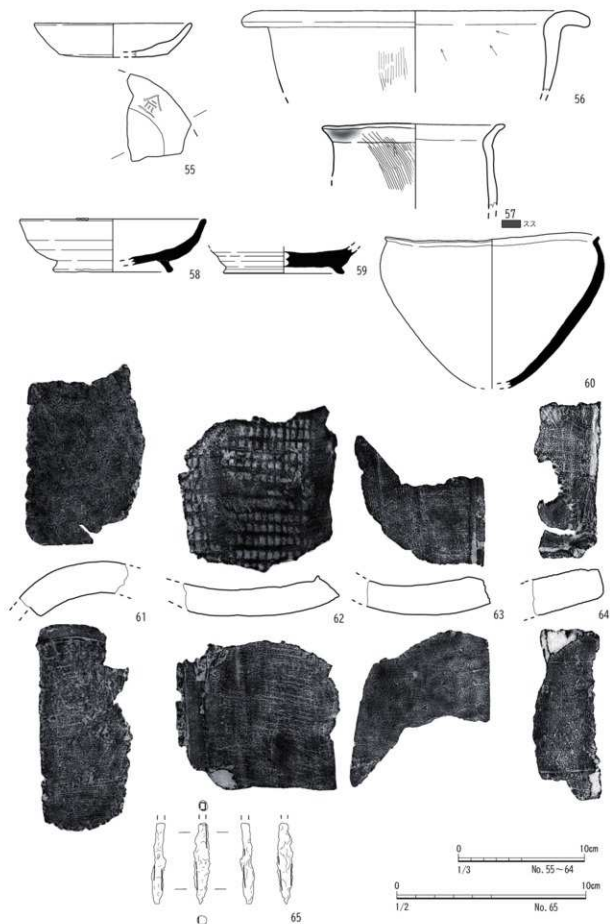


第78図 2号焼土集中実測図

玉祥寺遺跡



第79図 1号遺物集中実測図



第80图 1号遺物集中出土物実測図

玉祥寺遺跡

1号遺物集中内出土遺物【第80図】

- 55 は刻書土器である。坏外面に焼成前にヘラや釘などで記している。「金」に似る。
 56 は土師器鉢もしくは甕である。口縁は頸部から大きく反りかえる。
 57 は小型の土師器甕である。あまり外反しない口縁部の端部は平坦に仕上げられる。歪みがありやや粗雑な作りである。
 58 は須恵器甕である。体部はやや内湾しながら立ち上がる。高台は広く八の字形に開く。8世紀後半と考えられる。
 59 は須恵器の高台付甕か甕の底部である。厚い底面に端の尖る低い高台が付いている。
 60 は須恵器の甕か。頸部から胴部にかけて張りをもって膨らみ、底部に向かってすぼまる。口縁部は小さく外反する。全体的に至んでいる。
 61～64 は凹面に布目圧痕が残る布目瓦である。
 61 は丸瓦である。端部に分割の痕が明瞭に残る。
 62 は平瓦で、凸面に格子状の叩き目が、端部に分割の痕が残る。硬質で非常によく焼き締まる。
 63 は平瓦である。凸面はナデによって平滑に仕上げられる。端部に分割の痕が残る。
 64 は平瓦である。布目圧痕の端に布を巻き込んだような痕跡がみられる。
 65 は鉄製品で、断面が正方形で先端部が尖る。釘と考えられる。

遺構外からの一括出土遺物

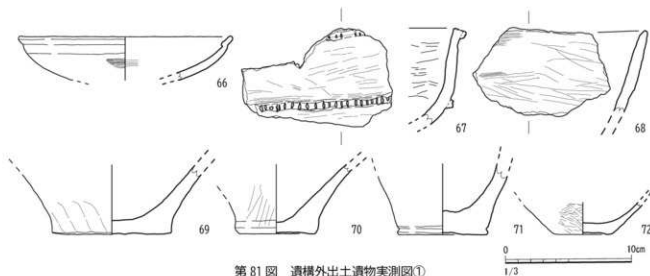
時期別、器種ごとに土器、瓦、鉄製品、石器について掲載した。

縄文土器【第81図】

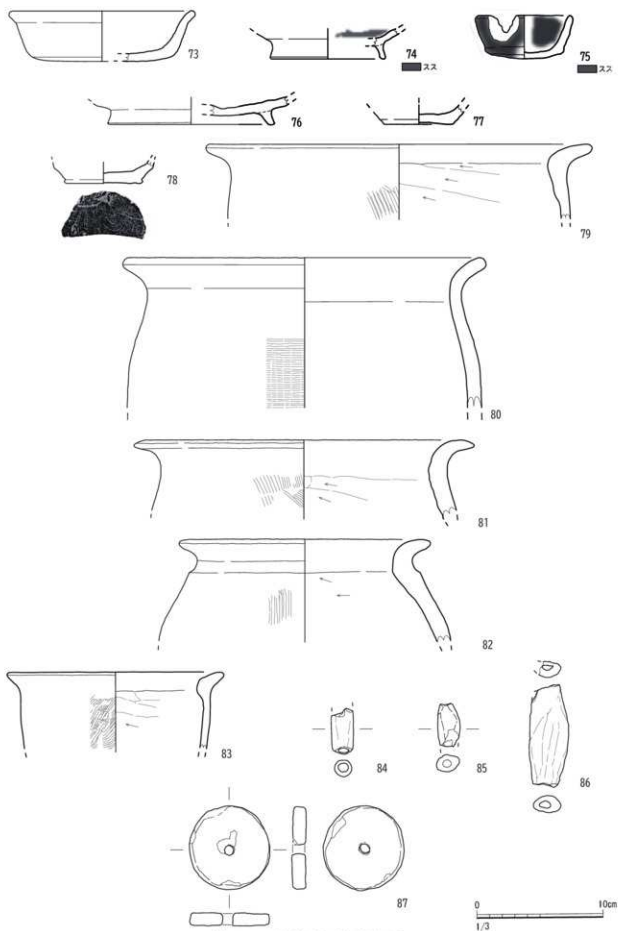
- 66～72 は縄文時代後期後半から晩期の土器と考えられる。
 66 は浅鉢形土器である。頸部はくの字形に小さく屈曲し、口縁が低く立ち上がる。
 67 は深鉢形土器である。口縁部と頸部に刻目突帯をもつ。
 68 は深鉢形土器である。粗製で直口口縁をもつ。
 69～71 は深鉢の底部である。底部端から胴部にかけて外反する。
 71 は底部端がやや張り出す。
 72 は浅鉢の底部と思われる。底面が上げ底気味である。

土師器【第82図】

- 73～83 は土師器である。



第81図 遺構外出土遺物実測図①



第 82 図 遺構外出土遺物実測図②

玉祥寺遺跡

73 は坏で、器壁が厚く、底面はやや丸みを帯びる。外反する口縁端部は丸く仕上げられる。内外面に赤色顔料を塗布する。

74 は坏である。やや高く端部の反った高台をもち、内面に煤が付着する。

75 は坏である。やや丸底で、腰部がわずかに張り出し高台のような形を呈する。口縁に焼成後の打ち欠きかみとめられるが、煤が付着することから灯明皿の灯芯置きとして使用されたと考えられる。内外面に赤色顔料が塗布される。

76 は壊もしくは鉢の底部である。高台は八の字形に開き、体部は広く開く。内外面に赤色顔料が塗布される。

77 は糸切底の小皿である。中世のもので、やや上げ底気味である。

78 は糸切底の小皿である。中世のもので、右回転のロクロを使用し成形される。

79 は甕である。口縁部はほぼ直角に折れ曲がるように外反する。

80 は開きの弱い口縁部をもつ。内面のケズリを非常に丁寧にナデ消しており、外面には横方向のハケメが裝飾的に施されている。

81 の口縁は丸みを持って外反する。

82 は厚手の甕である。段をなす頸部に、張りのある胴部をもつ。外面から口縁部内面まで赤彩を施しており貯蔵用とも考えられる。

83 は胴のあまり張らない甕である。器壁が薄く、ハケメは工具の後まではっきりと残る。

土製品【第82図】

84、85、86 は管状土錘である。86 は焼成前に扁平に潰れてしまっている。

87 は土製の紡錘車である。使用のためか中央穿孔部分が破損している。

須恵器【第83図】

88 ~ 94 は古代の須恵器である。

88、89 は坏蓋である。

88 は天井部から口縁部まで緩やかに伸びて、端部は屈曲をもたずやや丸く仕上げられる。

89 は器高が高く、口縁端部は屈曲するがかえりもたない。破損しているが輪状のつまみが付いていたと考えられる。内面に自然釉が掛かり、口縁部外面に重ね焼きの際に癒着した粘土塊が残る。そのため、焼成時は内面を上向きに、直径の近い坏などと重ねて焼いていたと想定される。時期は8世紀後半と考えられる。

90 は坏である。反りの少ない直線的な体部に、低く端部の屈曲する高台をもつ。高台内にはヘラ切り痕が残るが、内外面は丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げられている。8世紀後半と考えられる。

91 は短頸甕と考えられる。肩の張りはなだらかで、明瞭に屈曲する胴部と繋げられる。外面はケズリによって成形され、内面には同心円状当て具痕が残る。高台をもち、底部内面には高台接着の際のものと考えられる指頭圧痕が残る。高台端部は意図的とも思われる打ち欠きが見られる。8世紀後半と考えられる。

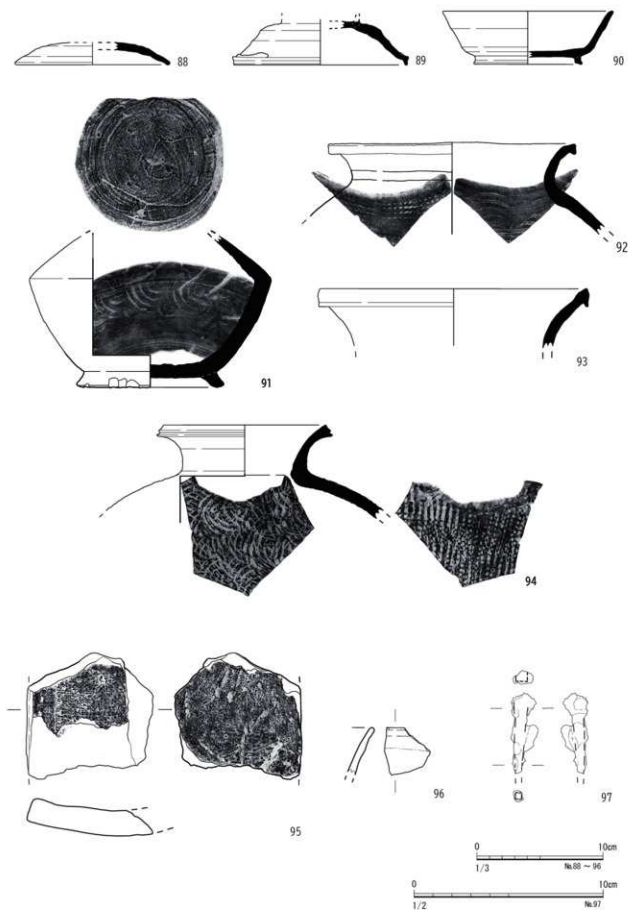
92 は古代の甕である。大型のもので、口縁部は短い首状の平坦面をもち、大きく外反する。外面に格子状の叩き目、内面に同心円状当て具痕が残る。

93 の口縁部は反りが弱く、端部は折り曲げた後、おそらく指で揃まむように断面三角形に成形される。

94 は外反する口縁部の端部に裝飾的な段がつけられる。外面と内面口縁部～頸部にかけて自然釉が掛かる。外面に格子状叩き目、内面に同心円状当て具痕が残る。

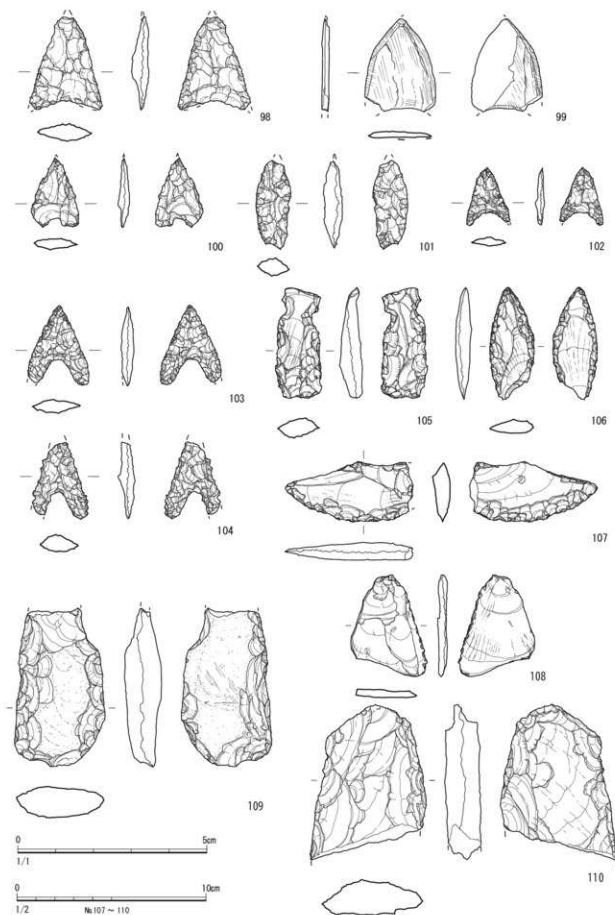
瓦【第83図】

95 は平瓦である。焼きが甘く、胎土は浅黄褐色に発色する。凹面に布目圧痕の残る布目瓦である。

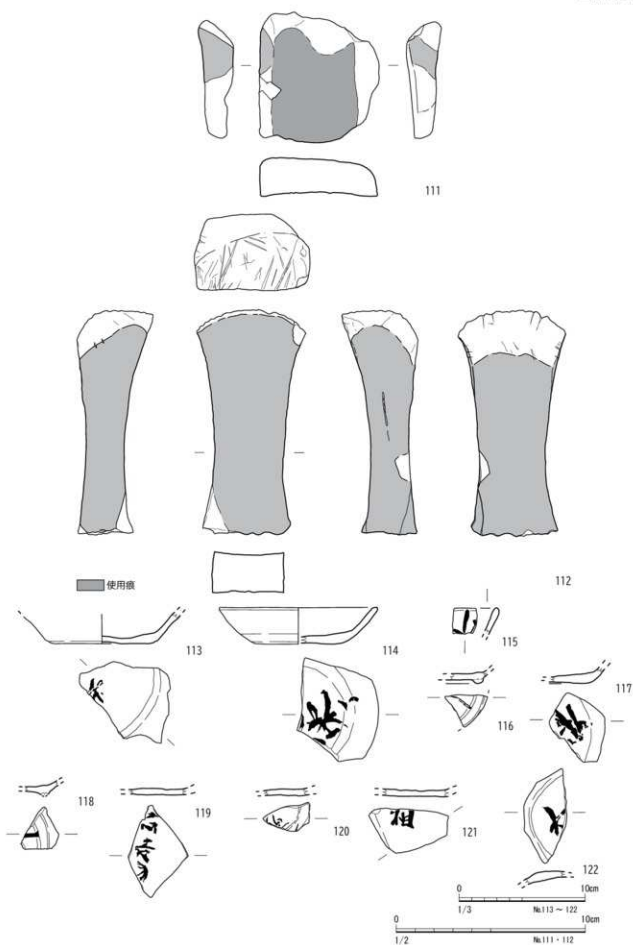


第 83 図 遺構外出土遺物実測図③

玉祥寺遺跡



第 84 図 遺構外出土遺物実測図④



第 85 図 遺構外出土遺物実測図⑤

玉祥寺遺跡

陶器【第83図】

96は陶器碗の口縁部である。内外面に灰オリーブ色の釉が掛かるが、外面は口縁部以下露胎している。胎土はにぶい橙色に発色する。近世以降のものと考えられる。

鉄製品【第83図】

97は先端が欠損し錆が著しいが、断面は方形に近く、釘の可能性はある。

石器【第84・85図】

98、100、102は石鏃で形態が二等辺三角形で基部に浅い抉りがある。

98、100は素材剥離の剥離面が一部残っている。

99は磨製の石鏃で先端と左右脚部や裏面の一部が欠損している。

101は不定形で平基の石鏃である。先端は欠損している。

103、104は石鏃で形態が二等辺三角形で基部に深い抉りがある。入念な調整加工が見られる。

105は石匙である。形態は縦長で両側縁頭近くにつまみ部分をつくり出している。剥離面が一部残る。

106はナイフ形石器と考えられる。両側縁に調整加工が施され、剥離面が残る。

107はスクレーパーと考えられる。先端部はやや鋭く両側縁の下部に刃部の調整加工が施される。剥離面が残る。

108は安山岩製の削器として扱った。表裏面にも素材の剥離面を残し、刃部の調整が見られる。

109は打製石斧である。両側縁に粗い調整加工を不整形に施している。自然面が残る。

110は打製石斧である。剥離面を残し粗い調整加工が施される。

111、112は砥石である。111の研磨面は3面使用している。112の研磨面は4面使用し、側面はかなり使い込まれて中央部が摩り減っている。

墨書土器【第85図】

113～122は墨書土器である。ほとんどが土師器の破片のため文字の判読が不明なものばかりであったが、資料として掲載した。

113、114、116～121は坏や埴の底面に墨書を行う。113は禾偏、もしくは「和」、119は「志□吉□□」、121は「相」と読めそうだが不明である。その他は判読不明。

115は坏の外面に墨書きしている。判読不明。

122は坏蓋の天井部に墨書きしている。「大」か「右」か？

第IV章 総括

【鉄製紡鐘車について】

令和2年度の調査では、1区 SI01 カマド袖部分より鉄製紡鐘車が出土した。菊池市内の遺跡において土製・石製紡鐘車は一般的によく見られるが、鉄製紡鐘車の出土は珍しいため、簡単にその概略をまとめてみたい。

紡鐘車とは糸を紡ぐための道具であり、土・石・鉄などで作られる円形の紡輪と、棒状の紡茎とで構成される。紡鐘車は繊維製品や他の紡織具と違って遺存しやすく、出土時期・地域が広範にわたるため、考古学において紡織史を検討する際にしばしば用いられる。

鉄製紡鐘車については、西日本では6世紀中葉から用いられ、7世紀には広く使用されている(坂野 2010)が、出土事例により他素材の紡鐘車と併存していることが分かっており、その素材の違いを用途の違いに求める研究がなされている。玉祥寺遺跡においても鉄製紡鐘車出現以降の古代～中世の包含層より土製紡鐘車が出土した(第82図 87)。

当初鉄製紡鐘車はその法量の強い画一性により、均質な糸を撚る必要性＝絹糸を使用した高級織物生産との関連が想定されていたが、植物繊維の付着した出土例がみられること(古庄 1992)、絹糸はその性質から撚りをかける必要のない絹糸で生産されること(堀田 1999)が指摘され、高級織物生産との関連付けは難しくなっている。用途について堀田氏は鉄製紡鐘車の分布傾向から麻布貢納国との関連を指摘しており、麻糸用と推定している。また、その普及の背景として8世紀前半に顕在化する調庸布の粗悪化に着目し、鉄製紡鐘車は調庸布の粗悪化を改善する方策の一環として用いられたと述べ、その出現と普及には律令官人の関与があったと推定している(堀田 1999)。

・熊本県内の事例

鉄製紡鐘車は東北、関東、九州北部などに顕著な集中域がみられるが、熊本県内でもいくつかの事例が知られている。以下、熊本県内の出土例を概観したい。

1. 玉祥寺遺跡(菊池市)

竪穴建物(SI01)より出土。紡茎の残存長 8.6 cm、紡輪の直径 4.5 cm、厚さ 0.2 cm、重さ 23.8g を測る。SI01 は出土した炭化材より7世紀後半～8世紀代の数値が得られている。

2. 栄の平遺跡(菊池市)

紡茎の残存長 19.2 cm、紡輪の直径 4.5 cm、厚さ 0.28 cm を測る。竪穴建物内から出土しており、栄の平遺跡の竪穴建物群には8世紀中頃～9世紀初頭の年代が示されている。

3. 4. 陣山遺跡(熊本市)

3は長さ 11.0 cm、直径 6.0 cm、重さ 34.6g を測る。薄い円盤状の紡輪に紡茎を装着したものである。カマドに瓦を使用する竪穴建物内からの出土である。

4は残存幅 3.3 × 3.4 cm、厚さ 0.1 cm、重さ 8.9g を測る。半ばを欠損するが、ほぼ円形を呈すると思われる。

5. 上の原遺跡(熊本市)

木棺墓を主体部とする周溝墓より出土。木棺上に置かれていたと考えられ、共存する土師器の年代から10世紀代と考えられる。出土時の長さは約 25cm、直径 4～6 cm を測った。

玉祥寺遺跡

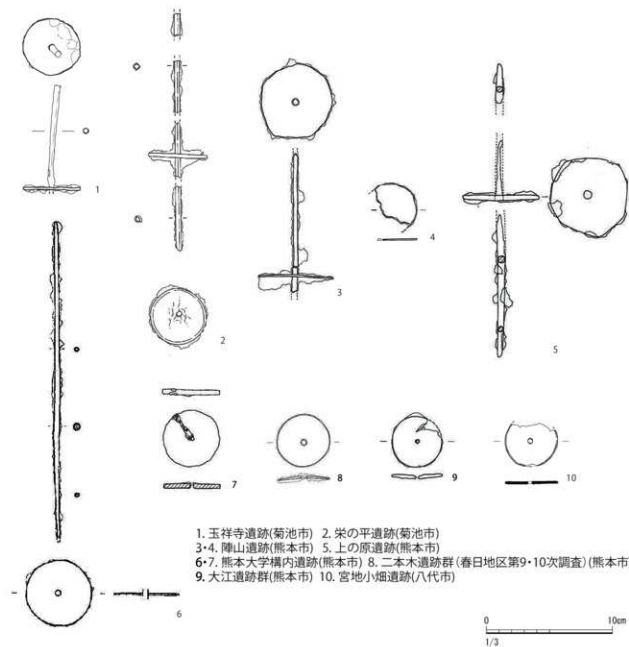
6. 7. 熊本大学構内遺跡(熊本市)

6は紡茎の長さ35.2cm、紡輪の直径5.2cmを測る。黒髪南地区270号竪穴住居址床面より出土。この地区の遺構は7世紀後半～8世紀後半が主体である。

7は本荘北区108号竪穴住居址床面より出土。時期は8世紀後半から9世紀前半ごろである。直径4.4cm、厚さ0.6cmである。石製紡錘車と重なって出土したが、中央の孔部分が完全に同一位置に重なっており、重ねて使用されていた可能性が高い。中央の孔部分から石製紡錘車と重なっていない側に繊維質が出ており、表面に付着している。廃棄時には木の棒が孔に刺さっていたと考えられる。

8. 二本木遺跡群(春日地区第9・10次調査)(熊本市)

12世紀後半の用途不明土坑より出土。長径4.3cm、短径4.2cm、厚さ0.2cm、重量12.89g。



第86図 熊本県内出土鉄製紡錘車

9. 大江遺跡群（熊本市）

6世紀から9世紀にかけての住居址や流路が確認された集落跡。鉄製紡錘車は包含層より出土しており、長径4.4cm、短径4.05cm、厚さ0.4cmを測る。

10. 宮地小畑遺跡（八代市）

隣接する宮地観行寺遺跡とともに古代官道（西海道）、官衙との間わりが指摘されている。包含層出土。全長4.2cm、厚さ0.15cm、孔径0.4cm、重量4.6gを測る。

熊本県下の出土例それぞれの法量を比較すると、紡輪径が4cm台のもの（1、2、4、7～10）、5、6cm台のもの（3、5、6）と2種類みられるが、非常に規格が揃っていることが分かる。また、紡茎は1、2、3、5、6で装着されたまま出土しており、断面形状は円形（1、3、5、6）、正方形（2）の2種類が認められる。2に関しては紡輪中央の孔も正方形を呈しており、セット関係が明確である。紡茎が装着されない状態で出土したものには熊本大学構内遺跡の出土例（7）のように、鉄製ではないものが想定される例もある。

紡錘は一般的に水分を補給しながら行なうため、紡茎の素材に関わらず鉄製の紡輪を用いる以上は錆や腐食が想定される。紡がれた糸に錆が移るのを防ぐためには継続的な紡織作業が行われなければならない（坂野2010）ので、各遺跡において頻繁な紡錘作業が行われていたであろうことは想像に難くない。堀田氏の指摘によると肥後国も麻布貢納国のひとつであるため、これらの遺跡で出土した鉄製紡錘車も調膚布に用いる麻糸用であった可能性は十分にある。

【竪穴建物について】

玉祥寺遺跡では平面プランを確認できなかったものも含め、13棟の竪穴建物が出された。出土した調査区の内訳は1区1棟、6区3棟、7区4棟、9区2棟、12区3棟である。ほとんどの建物からカマドもしくはカマドの痕跡と考えられる粘土・焼土が検出されており、床面には一様に硬化面がみとめられる。検出地点により、北西（1・9区）側・南東（6・7・12区）側で集落としてのまとまりをもつと考えられる。

7区では4棟の切り合った竪穴建物を検出したが、検出状況により建築されたのは古い順にSI09→SI08→SI07→SI06であると分かった。これらの建物はほぼ同位置に作り直されており、出土遺物から時期差もさほどないと思われるが、カマドの位置は南東から北西へと移り変わっている。また、1辺6m超を測るSI07～SI09から1辺4m台のSI06へと規模が小さくなっている。これを踏まえると、6区で検出されたSI03、SI04についてもその規模から古い順にSI04→SI03という時期差が想定できるかもしれない。

玉祥寺遺跡の北西には直線距離で2km程の位置に鞠智城が所在している。今回検出された竪穴建物の時代は、鞠智城が整備された鞠智城1期（7世紀の第3四半期～第4四半期）から城の機能が変わる鞠智城IV期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）に相当している。鞠智城周辺の古代の遺跡としては竹ノ上原遺跡、十連寺跡、台遺跡、上鶴頭遺跡、西寺遺跡（菊池市）、御宇田遺跡群（山鹿市）などがあるが、いずれも掘立柱建物や瓦、墨書土器などがみられる郡家、郡寺、官衙に関連する遺跡として知られている。

玉祥寺遺跡では1～13区いずれの調査区からもピットを検出したが、掘立柱建物と明確に判断できるものはなかった。ただし7区SI07、SI09より布目瓦が出土しているため、同一集落内に瓦を伴う建物が存在していたことは間違いない。本調査で検出された集落の性格は不明だが、鞠智城の造営及び周辺官衙関連遺跡と何らかの間わりがあったものと想定される。

玉祥寺遺跡

最後に各時代ごとの概要を簡単に述べてまとめたい。

〔縄文時代〕

土器、石器ともに調査区域北側に出土が偏った。概ね基本層序Ⅰ層・Ⅱ層（アカホヤ二次堆積層）からの出土であり、土器は縄文時代後期の黒色磨研土器が目立った。明確な遺構は検出されなかった。

〔弥生時代〕

玉祥寺遺跡は弥生時代の埋蔵文化財包蔵地として知られているが、今回の調査では土器片を出土したのみで遺構・遺物ともに検出されなかった。

〔古代〕

竪穴建物を13棟検出した。時期は出土遺物や自然科学分析から7世紀後半～9世紀代の範囲が想定される。

〔中世・近世〕

道路状遺構、溝状遺構が検出された。幅1mに満たない溝状遺構は概ね方向を同じくしており、中世以降の土地区画溝である可能性が高い。中世の遺物については糸切底の土師器小皿や瓦質土器のほか龍泉窯系青磁が出土しているが、その時期は15世紀代に限定される。

引用・参考文献

- 1982 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2
1984 熊本県教育委員会『上の原遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第64集
1992 古庄浩明「鉄製紡錘車の研究—東日本への伝播について—」『國學院大學考古学資料館紀要』第8号 國學院大學考古学資料館
1996 熊本県教育委員会『陣山遺跡』熊本県文化財調査報告第155集
1999 堀田孝博「古代における鉄製紡錘車普及の意義について—神奈川県下資料を中心として—」『神奈川考古』第35号 神奈川考古同人会
2004 旭志村教育委員会『栄の平遺跡』旭志村文化財調査報告第7集
2006 熊本県教育委員会『大江遺跡群Ⅲ』熊本県文化財調査報告第232集
2009 熊本県教育委員会『八代平野干拓遺跡群・宮地小畑遺跡・宮地観行寺遺跡』熊本県文化財調査報告第254集
2009 熊本大学埋蔵文化財調査室『熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅴ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第5集
2010 坂野千登勢「資源の再利用と古代社会—土器再利用の基礎研究—」埼玉大学 博士学位論文（博文化甲第12号）
2012 熊本県教育委員会『二本木遺跡群6（春日地区第9・10次調査）』熊本県文化財調査報告第274集
2015 熊本県立裝飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県教育委員会
2023 熊本県教育委員会『鞠智城 第37次調査報告』鞠智城文化財調査報告第12集

第V章 自然科学分析

玉祥寺遺跡発掘調査自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器附着炭化物などが測定対象となり、約 5 万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。ここでは、玉祥寺遺跡の発掘調査で検出された遺構の構築年代に関する資料を得ることを目的に、出土した木炭を対象として放射性炭素年代測定を実施する。

2. 試料と方法

測定試料は、12 区 SF05 (溝) の⑤層から出土した炭化材、10 区 SK02 (土坑) の埋土から出土した炭化材、1 区 (東) SI01 (竪穴建物) の掘方から出土した炭化材、9-2 区 SD13 (溝) から出土した炭化材の計 4 点である。表 1 に測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。試料は、前処理・調整後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。

表1 測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
1	12区 SF05 (溝) ⑤層	炭化材 (ケリ)	超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
2	10区 SK02 (土坑) 埋土	炭化材 (コナラ風クスギ節)	超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
3	1区 (東) SI01 (竪穴建物) 掘方	炭化材 (コナラ風クスギ節)	超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
4	9-2区 SD13 (溝)	炭化材 (ケマシダ風イヌシダ節)	超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS

3. 結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。表 2 にこれらの結果を示す。

1) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (シグマ) (68.27% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値及びサングの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 20、較正プログラムは OxCal 4.4 である。

玉祥寺遺跡

暦年代（較正年代）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ （68.27%確率）と2 σ （95.45%確率）で表示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。（）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 測定結果

試料番号	測定値 (PLD)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP \pm 1 σ)	^{14}C 年代 (年BP \pm 1 σ)	暦年代（西暦）	
					1 σ (68.27%確率)	2 σ (95.45%確率)
1	47759	-26.15 \pm 0.17	1284 \pm 20	1285 \pm 20	667-706 cal AD (33.94%)	671-709 cal AD (38.41%)
					727-729 cal AD (1.36%)	
					737-732 cal AD (15.75%)	
2	47760	-28.21 \pm 0.17	1309 \pm 21	1310 \pm 20	665-686 cal AD (28.52%)	659-706 cal AD (47.41%)
					712-762 cal AD (28.65%)	
					764-772 cal AD (11.10%)	
3	47761	-26.86 \pm 0.17	1327 \pm 20	1325 \pm 20	659-679 cal AD (44.27%)	654-690 cal AD (55.26%)
					748-758 cal AD (18.91%)	
					768-771 cal AD (5.69%)	
4	47762	-24.48 \pm 0.18	343 \pm 19	345 \pm 20	1494-1524 cal AD (25.22%)	1477-1528 cal AD (34.86%)
					1561-1563 cal AD (1.37%)	
					1572-1602 cal AD (25.13%)	
					1609-1630 cal AD (16.54%)	
					1540-1546 cal AD (1.66%)	
1549-1635 cal AD (58.93%)						

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元

4. 所見

玉祥寺遺跡で検出された遺構の構築年代に関する資料を得る目的で、各遺構から出土した炭化材を対象に加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、12区 SF05（溝）の⑤層で出土した炭化材（クリ：以下、測定結果はⅡ章を参照）は、補正 ^{14}C 年代が1285 \pm 20年BP、2 σ の暦年較正值は671-709 cal AD (39.41%)、711-774 cal AD (56.04%)であった。10区 SK02（土坑）の埋土で出土した炭化材（コナラ属クスギ節）は、補正 ^{14}C 年代が1310 \pm 20年BP、2 σ の暦年較正值は659-706 cal AD (47.41%)、726-732 cal AD (1.52%)、736-773 cal AD (46.52%)であった。1区（東）SI01（竪穴建物）の掘方で出土した炭化材（コナラ属クスギ節）は、補正 ^{14}C 年代が1325 \pm 20年BP、2 σ の暦年較正值は654-690 cal AD (55.26%)、696-703 cal AD (2.94%)、741-773 cal AD (37.25%)であった。9-2区 SD13（溝）で出土した炭化材（クマシデ属イヌシデ節）は、補正 ^{14}C 年代が345 \pm 20年BP、2 σ の暦年較正值は1477-1528 cal AD (34.86%)、1540-1546 cal AD (1.66%)、1549-1635 cal AD (58.93%)であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4), 1-14.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社。p.301-322.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Bütgen, U., Capano, M., Fahn, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

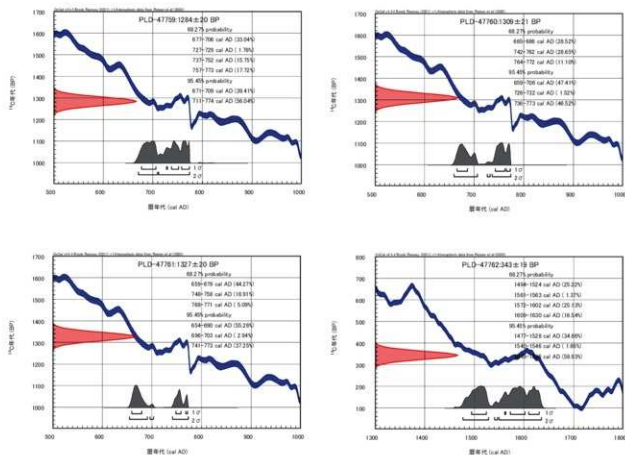


図1 暦年較正結果

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。また、遺構から出土したものを検討することにより、木材利用状況や流通を探る手がかりにもなる。ここでは、玉祥寺遺跡で出土した炭化材について、用材選択を検討するための樹種同定を実施した。

2. 試料

試料は、出土した炭化材 4 点である。各試料の詳細は樹種同定結果と共に表 1 に記す。

3. 方法

炭化材を自然乾燥させた後、横断面（木口）、放射断面（柃目）、接線断面（板目）の 3 断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

4. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。炭化材は、広葉樹 3 分類群（コナラ属クスギ節、クリ、クマシデ属イヌシデ節）に同定された。

玉祥寺遺跡

各分類群の解剖学的特徴等を記す。

表1 樹種同定結果

地区	遺構	層位	形状	樹種	備考
12区	SF05(溝)	⑤層	破片	クリ	1285±20yBP
10区	SK02(土坑)	埋土	破片	コナラ属クスギ節	1310±20yBP
1区(東)	SI01(竪穴建物)	掘方	柱目状	コナラ属クスギ節	1325±20yBP
9-2区	SD13(溝)		ミカン割状	クマシデ属イヌシデ節	345±20yBP

・コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Cerris* ブナ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1~2列配列した後、急激に道管径を減じて、単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が3~4列配列した後、やや急激に道管径を減じ、晩材部では小径の道管が集まって火炭状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus subgen. Euarpinus* カバノキ科

散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は対列状~交互状となる。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~40細胞高のものと同集合放射組織とがある。

5. 考察

樹種同定を実施した炭化材は、住居跡、溝、土坑から出土しており、いずれも何らかの活動によって火を受けたことが推定される。これらの炭化材は、広葉樹3分類群に同定された。同定された各分類群について材質等とみると、クスギ節は、二次林や河畔林を構成する落葉高木、クリとイヌシデ節は二次林等に生育する落葉高木である。いずれも木材は重硬で強度が高い。

炭化材が出土した各遺構は、炭化材を用いた年代測定が実施されている。その結果をみると、1区(東)SI01(竪穴建物)が1325±20yBP、10区SK02(土坑)が1310±20yBP、12区SF05(溝)が1285±20であり、比較的近い値を示す。これらは、暦年校正結果によれば、7世紀後半~8世紀代に相当する。一方、9-2区SD13(溝)の年代測定結果は345±20yBPであり、暦年校正結果は15世紀後半~17世紀前半を示している。この結果から、9-2区SD13(溝)と他の3基とで時期が異なることが推定される。

暦年校正結果で7世紀後半~8世紀代の値が得られた遺構についてみると、SI01とSK02がクスギ節、SF05がクリに同定された。この結果から、7世紀後半~8世紀代の遺跡周辺にクスギ節やクリが生育していたことが推定される。伊東・山田(2012)のデータベースによれば、熊本県内の古墳時代末期~平安初期ではクスギ節は鞠智城跡の柱材、柳町遺跡の柱材や丸坑に、クリは鞠智城跡の平鋸、鋤or鋸、杭、柳町遺跡の柱材にそれぞれ確認された例がある。

一方、暦年校正結果で15世紀後半~17世紀前半の値が得られたSD13はイヌシデ節に同定され、当該期の遺跡周辺に生育していたことが推定される。伊東・山田(2012)のデータベースでは当該期にイヌシデ節が確認された例は報告されていない。近い時期では、灰塚遺跡の土壇墓出土木炭にイヌシデ節が確認された例がある。今回の結果は、15世紀後半~17世紀前の古植生やイヌシデ節の利用状況を知る上でも重要な資料である。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集集,京都大学木質科学研究所。

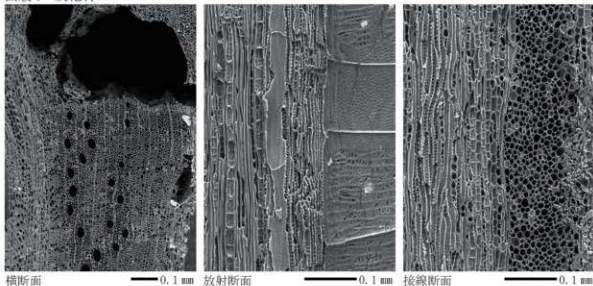
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。

- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,444p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

玉祥寺遺跡

図版1 炭化材

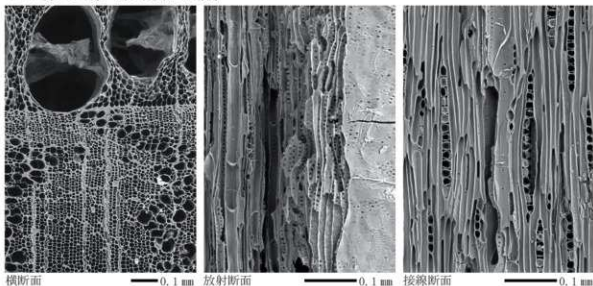


横断面 0.1 mm

放射断面 0.1 mm

接線断面 0.1 mm

コナラ属クスギ節 1区(東)SI01掘方

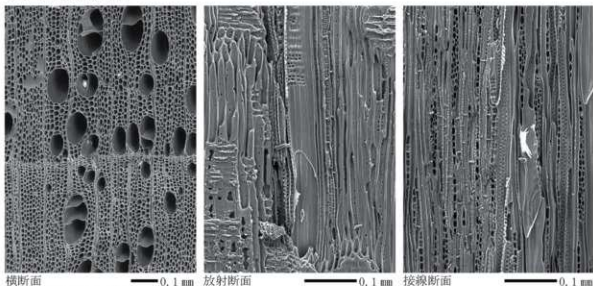


横断面 0.1 mm

放射断面 0.1 mm

接線断面 0.1 mm

クリ 12区SF05 ⑤層



横断面 0.1 mm

放射断面 0.1 mm

接線断面 0.1 mm

クマシダ属イヌシダ節 9-2区SD13

石製品

件名 No.	数量 No.	品名	規格 サイズ	形状	用途	石材	法番()は残存				形状的特徴	備考		
							最大長 (ca)	最大幅 (ca)	厚さ (ca)	重量 (g)				
20	8	9-1	S102	楕円盤	打撃石	花崗岩	(9.4)	6.3	1.6	(94.8)	無彫刻	上平部欠損		
84	98	9-3			打撃石	花崗岩	筑山岩(西北九州産)	(2.4)	1.9	0.4	(1.6)	凹縁無彫刻	先端部・片側部のわずかに欠損	
84	99	1	w-3		磨製石	花崗岩	筑山岩(西北九州産?)	(2.4)	1.8	0.2	(1.1)	凹縁無彫刻	先端部のわずかに欠損・凹縁部欠損・表面加工品	
84	100	1	Y-4		打撃石	花崗岩	筑山岩(西北九州産)	(1.8)	1.3	0.3	(0.6)	凹縁無彫刻	先端部のわずかに欠損	
84	101	1			打撃石	花崗岩	美祿石(西北九州産)	(2.3)	0.9	0.5	(1.1)	磨製面に近い	先端部欠損	
84	102	8	8-10	2層	打撃石	花崗岩	美祿石(西北九州産)	(2.0)	1.2	0.3	(0.3)	凹縁無彫刻	片側部の一部欠損	
84	103	3	1層		打撃石	花崗岩	チャート(白色)	(2.1)	1.6	0.4	(0.8)	凹縁無彫刻	片側部欠損・表面深さ約5mm欠損	
84	104	1	w-3		打撃石	花崗岩	美祿石(西北九州産)	(2.0)	1.5	0.5	(0.8)	凹縁無彫刻	先端部・片側部欠損・表面長割	
84	105	1			1層	打撃石	花崗岩	筑山岩(西北九州産)	5.8	2.4	1.2	(16.3)	磨製	
84	106	1		1層	打撃石	ナイフ形石	筑山岩(西北九州産)	5.9	2.4	0.9	11.4	本像形	凹縁部石部?	
84	107	1			打撃石	スライバー	筑山岩(西北九州産)	(6.8)	3.2	0.9	(19.7)		凹縁のわずかに凹縁から欠損	
84	108	8	SF06	2層以上	打撃石	花崗岩	筑山岩(西北九州産)	5.4	4.0	0.5	10.1			
84	109	1		1層	打撃石	花崗岩	花崗岩	(8.4)	4.8	2.0	(104.9)	無彫刻	先端部欠損	
84	110	2		1層	打撃石	花崗岩	細色片岩	(8.2)	6.1	1.9	(120.8)	無彫刻	下平部欠損	
85	111	7	P197		磨製石	花崗岩	磨製?	(6.7)	6.4	1.9	138.8			
85	112	4	k-4		磨製石	花崗岩	透輝岩(天草産)	11.8	5.7	3.3	294.4			

鉄製品

件名 No.	数量 No.	品名	規格 サイズ	形状	用途	材質	法番()は残存				備考
							最大長 (ca)	最大幅 (ca)	厚さ (ca)	重量 (g)	
19	4	1	S21 (野山産物)		鉄製品	鉄線	8.6			23.8	径(線間)4.5ca(幅)0.5ca、厚さ(線間)0.2ca(幅)0.4ca
47	35	2	S20 (野山産物)	3層	鉄製品	釘	(5.0)	1.0	0.6	2.4	頭下径0.5 - 0.7ca、先端径0.2 - 0.3ca、断面形は正方形に近い
76	54	6	S20 (野山産物)		鉄製品	釘7	6.3	1.0	0.6	9.7	
80	65	7	E-8		鉄製品	釘	(4.3)	0.8	0.6	4.6	頭下径0.3 - 0.5ca、先端径0.4 - 0.6ca、断面形は正方形に近い
83	97	7	E-8		鉄製品	釘	(4.2)	1.3	0.7	108.0	

写真図版

図版 5



1区西側調査区完掘状況（南から）



1区東側調査区完掘状況（南から）



2区調査区完掘状況（西から）



3区調査区完掘状況（南から）

図版 7



4区調査区完掘状況（南から）



5区調査区完掘状況（東から）



6区調査区完掘状況（西から）



7区調査区完掘状況（南西から）

図版 9



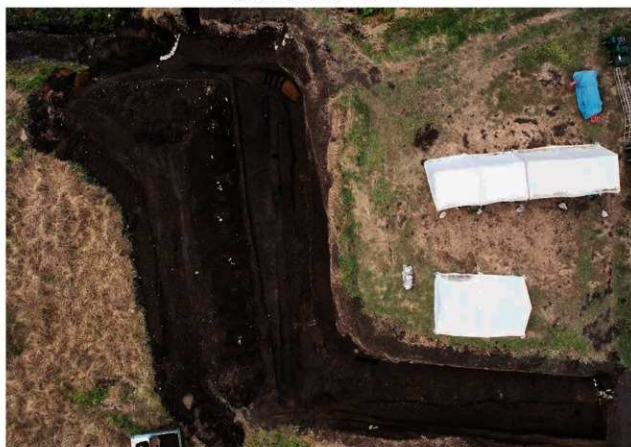
8区調査区完掘状況（南西から）



9区調査区完掘状況（南西から）



10区調査区完掘状況（南から）



11区調査区完掘状況（東から）

図版 11



12区調査区完掘状況（東から）



13区調査区完掘状況（北から）



S101 使用時 東から



S101 遺物出土状況 南東から



S101 鉄製紡錘車出土状況 南から



S101 完盤状況 北東から



S102 鉄滓出土状況 南から



S102 カマド粘土範囲 南から



S102 使用時 西から



S102 完盤状況 南西から

図版 13



S103 使用時 南東から



S103 完掘状況 南東から



S104 カマド粘土・検出状況 北東から



S104 カマド完掘 北西から



S105 使用時 北から



S106 遺物・硬化面検出状況 南から



S106 使用時 南東から



S106 完掘状況 南東から



S107 使用時。遺物出土状況 北から



S107 完掘 北から



S108・S109 カマド検出状況 北から



S108 使用時 北から



S109 遺物出土状況 (26) 南から



S109 遺物出土状況 (26) 南から



S109_Pit2 土層断面 南から



S109 ビット3 遺物 (23) 出土状況 西から



S109 使用時 北から



S109 完掘状況 北から



S110 使用時 東から



S110 完掘状況 東から



S111 使用時 東から



S111. 完掘状況 北東から



SF01 遺物 (34) 出土状況 西から



SF01 遺物 (34) 出土状況 東から



SF01・SD03 完掘状況 東から



SF02 検出状況 北東から



SF03 検出状況 北から



SF04 硬化面検出状況 東から



SF04・SD18 完掘状況（6区側）西から



SF04 完掘状況 西から



SF05 遺物出土状況 南から



SF05 硬化面検出状況（6区）北東から

図版 17



SF05 完掘状況 (6区) 北から



SF05 完掘状況 (12区) 南西から



SF06・SF07 硬化面①検出状況 北西から



SF06・SF07 硬化面②検出状況 北西から



SF06・SF07 硬化面④検出状況 西から



SF06・SF07 硬化面⑤検出状況 北西から



SF06・SF07 硬化面⑥検出状況 北西から



SF06・SF07 完掘状況 北西から



SD01 完掘状況 北から



SD02 完掘状況 西から



SD04 完掘状況 西から



SD05 完掘状況 北から



SD06 完掘状況 東から



SD07・SD08 完掘状況 北から



SD09・SD10 完掘状況 南東から



SD12 礫出土状況 北から

図版 19



SD16 内獣骨検出状況 南東から



SD16 内獣骨検出状況 東から



SD12 ~ SD16 完掘状況 北から



SD17 完掘状況 南東から



SD19・21 完掘状況 南から



SD19・21 完掘状況 北から



SD20 完掘状況 東から



SD22 完掘状況 西から



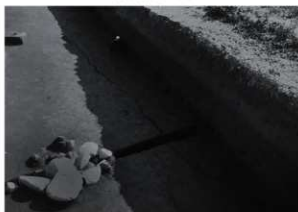
SK01 完整状況 西から



SK03 検出状況 西から



SK03 完整状況 南東から



SK03・SK04 検出状況 東から



1号焼土集中完整状況 東から



2号焼土集中完整状況 西から



1号遺物集中 北から



1号遺物集中 南から



SI01 カマド使用時 北東から



SI02 カマド使用時 南から



SI03 カマド使用時 南から



SI04 カマド粘土検出状況 北東から



SI08 カマド遺物出土状況 南西から



SI08 カマド使用時 北から



SI09 カマド遺物出土状況 北から



SI09 カマド使用時 北から



SI10 カマド使用時 東から



SI12 土層断面 北東から



SI13 土層断面 南から



1号焼土集中土層断面 東から



2号焼土集中土層断面 西から



1区(西側)基本土層 東から



1区(東側)基本土層 西から



2区基本土層 西から

図版 23



3区基本土層 南から



4区基本土層 東から



5区基本土層 東から



6区基本土層 東から



7区基本土層 北から



8区基本土層 東から



9-3区基本土層 東から



10区基本土層 北から



11区基本土層 南から



12区基本土層 北から



SI01 出土遺物 (1)



SI01 出土遺物 (4)



SI02 出土遺物 (7)



SI09 出土遺物 (20)



SI09 出土遺物 (26)



SI12 出土遺物 (30)



SF01 出土遺物 (32)



SF01 出土遺物 (34)



SD19 出土遺物 (51)



1号遺物集中出土遺物 (55)



1号遺物集中出土遺物 (58)



遺構外出土遺物 (75)



遺構外出土遺物 (90)



遺構外出土遺物 (98)



遗構外出土遺物 (99)



遺構外出土遺物 (100)



遺構外出土遺物 (101)



遺構外出土遺物 (102)



遺構外出土遺物 (103)



遺構外出土遺物 (104)



遺構外出土遺物 (105)



遺構外出土遺物 (106)

图版 27



遺構外出土遺物 (107)



遺構外出土遺物 (114)



遺構外出土遺物 (115)



遺構外出土遺物 (117)



遺構外出土遺物 (118)



遺構外出土遺物 (119)



遺構外出土遺物 (120)



遺構外出土遺物 (121)

報告書抄録	
ふりがな	ぎょくしょうじいせき
書名	玉祥寺遺跡
副書名	一級奈良地区中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一
シリーズ名	菊池市文化財調査報告
シリーズ番号	第15集
編著者名	西坂 知麻、椎葉 天明、北原 美和子、中尾 健照
編集機関	菊池市教育委員会
所在地	〒861-1392 熊本県菊池市隈府 888 番地 Tel.0968-25-7232
発行年月日	2024年2月29日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				
ぎょくしょうじいせき	くまもとけんきくちしぎょくしょうじ	43210	210-052	32度59分24秒	130度48分17秒	2020.9.2 ~2022.11.30	3,900㎡ ほ場整備
玉祥寺遺跡	熊本県菊池市玉祥寺						

ふりがな	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
所収遺跡	所在地				
ぎょくしょうじいせき	包蔵地	古代	竪穴建物	土師器 須恵器 瓦質土器	鉄製紡錘車
玉祥寺遺跡		中・近世	道路状遺構 溝状遺構	土製品 石製品 鉄製品	
要約		古代の竪穴建物や中世以降の道路状遺構、溝状遺構等が確認された。			

菊池市文化財調査報告第15集

玉祥寺遺跡

— 筑後尾地区中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

令和6年2月29日 発行

編集発行 菊池市教育委員会

〒861-1392 熊本県菊池市限府888番地

印刷 シモ夕印刷株式会社 熊本支店

〒862-0951 熊本県熊本市中央区上水前寺2丁目16-16